

日本統計学会会報

NO.121 / 2004. 10.20

発行 日本統計学会
東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-8569 Tel 03-3442-5801 Fax 03-3442-5924
編集責任 竹村彰通(理事長) / 佐藤整尚(庶務理事)
大屋幸輔(広報理事) / 栗原考次(広報理事)
振替口座 00190-2-61361
銀行口座 みずほ銀行広尾支店普通1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1 巻頭随筆:「統計学コンソーシアムへの期待」伴 金美... 1	6.5 チューリアルセミナー報告塚田良雄...18
2 新理事長就任挨拶竹村彰通... 3	6.6 市民講演会報告美添泰人・柴田里程...19
3 前理事長退任挨拶国友直人... 3	6.7 シンポジウム報告柳川 堯...20
4 第9回日本統計学会賞について 4	7 2005年度統計関連学会連合大会について22
4.1 第9回日本統計学会賞 4	8 国際会議参加報告22
4.2 受賞のこたば小西貞則・谷口正信・森棟公夫... 5	8.1 COMPSTAT '04伊原 一...22
5 日本統計学会小川研究奨励賞 7	8.2 IFCS2004に参加して.....馬場康雄...23
5.1 受賞者と対象論文 7	8.3 Celebrating Statistics: Cox 80th Birthday Meetingへ の出席を機にして赤平昌文...25
5.2 受賞者および対象論文の報告吉田朋広... 8	9 会長候補者推薦のお願い26
5.3 小川研究奨励賞を受賞して内田雅之... 8	10 研究部会新設公募26
6 統計関連学会連合大会 9	11 学会賞の創設26
6.1 実行委員会報告早川 毅... 9	11.1 新しい賞の概要藤越康祝...26
6.2 企画委員会報告柴田里程...10	11.2 規程27
6.3 コンペティションセッション報告宮川雅巳...14	12 科学研究費への応募促進について田村義保・竹村彰通...28
6.4 コンペティションセッション最優秀賞・優秀賞 受賞者の言葉荒木由布子・清水泰隆 川喜田雅則・来嶋秀治・馬場国博...16	13 2004・2005年度評議員選挙結果29
	14 第72回日本統計学会総会報告29
	15 2002・2003年度理事会議事録33
	16 会合案内34
	17 事務局から36

巻頭随筆

1 統計学コンソーシアムへの期待

伴 金美(大阪大学大学院経済学研究科)

1998年10月に出された大学審議会の答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について - 競争的環境の中で個性が輝く大学 - 」は、学生定員が入学希望者数を上回る中で、生き残りをかけた大学の動きを見据えてまとめられたものである。その意味では、1991年に出された大学設置基準の大綱化で明け暮れた1990年代は、21世紀の激烈な競争時代への準備期間と言えるものであり、統計学分野に属している研究者も否応なく対応を迫られてき

た。

私の在籍する大阪大学大学院経済学研究科も、製造物責任が問われるケースが時々あるものの、統計的手法を身につけ、実証分析のできる研究者を多く送り出してきた。日本統計学会に所属している教員も他大学と比較すれば多い。しかし、研究分野が多様化する中で、必要と思われるすべてを教育することはできない。例えば、21世紀COEで「アンケート調査と実験による行動マクロ動学」

の拠点として選ばれたが、統計関係者ならすぐ思いつく「標本調査法」や「実験計画」などという講義はとて準備できない。そのために、これまでも多くの方々から「統計知識のない統計分析屋」との批判も受けてきた。しかし、スクラップ・アンド・ビルドが前提の中で、教員の増員は望めない。ましてや、縁の下の力持ちに光が当たることはない。

大学はユニバーシティーと称されるように、研究分野に多様性のあることが存立基盤であるとの認識が、長い歴史的背景に基づいて確立していた。したがって、短期的な視野しか持たない民間企業と異なり、競争力を高めるために資源を集中させることは本来できないはずであった。その中で大学の設置基準の大綱化は、制度的に強制された多様化ではなく、各大学の独自の判断でユニバーシティーの形成を促すものであった。しかし、意図に反して、偏狭な効率性観点から、資源の散逸に荷担したと言われている。その反省をする間もなく、大学は競争力強化に追いまくられ、強者は増殖し、弱者は切り捨てられている。「盛者必衰の理」は、平家物語の有名な指摘であるが、それすら忘れられている。もちろん、末期は新時代への扉という期待はあるものの……。

では、統計学は強者であろうか。残念ながら、弱者そのものである。統計学は、どの分野でも必要とされるが、多くの大学では各部局（業界用語で、学部・研究科・研究所のような組織単位を意味する）に分散して配置され、各組織ではごく少数派である。したがって、ポストを一時的に守る力はあっても、拡大する力は期待できない。大綱化以前においては、教養教育として「教養部」が存在し、そこにわずかな集団が存在したが、教養部廃止の流れで各部局に散らばった。その時の経験を踏まえると、今日の大学間競争が厳しくなる中で、多数派を形成できない統計学の行く末は想像に難くない。

大阪大学経済学研究科では、統計学基礎、統計解析、応用統計解析、計量経済学基礎、エコノメ

トリックスなどの多くの科目を大学院生に提供しているが、各科目とも受講生は50人を大幅に上回る状況にある。したがって、少ない陣容では、受講生が数人しか見込まれなければ、費用対効果に基づいてカットせざるを得ない。問題は、数人の受講生しか見込まれなくても、必要される科目が数多くある。

解決策は、比較優位の原則に基づいた大学間での教育面での協力であろう。大学間での競争が厳しくなる中で協力関係の強化は、一見矛盾しているかもしれない。しかし、各企業や世界各国は、厳しい競争関係にあるとともに、弱点を補完しあうことで競争力強化に成功している。現に、大阪大学においても、受講生の半分が他大学という例が生まれつつある。ただ、大学間協力をする上での問題点は、交流協定に基づいた「一対一」が主流であり、「一対多」あるいは「多対多」の協力関係は、大学コンソーシアム京都など特定の地域でみられるものの、全国規模ではない。一つの提案は、統計学コンソーシアムのような、研究分野ごとのコンソーシアムができないかということである。日本統計学会では、多分同じ意図に基づいてチュートリアルセミナーを実施している。この動きは、他の学会への広がりを見せており、セミナー開催で資金を得て、それで学会を開催するというような例もある。しかし、セミナーではなく、単位認定を前提とした仕組みができないであろうか。教える側も、自らの研究内容を心おきなく学生にぶつけることができる。大学院設置基準に照らしても、学会セミナーの単位認定は不可能かもしれないが、特定の大学組織がそれを肩代わりすれば制度的には可能である。個々の大学では成立し得ないクラスも、全国規模でみれば成立する。テーマ毎に3～4日の合宿形式の集中講義を開催すれば、講義以上の成果も期待できる。

新しい試みには乗り越えなければならない多くの壁があると思われるが、どこか手を挙げるところはありませんか？

2 新理事長就任挨拶

竹村 彰通（東京大学大学院情報理工学系研究科）



平成16年9月4日に開催された日本統計学会評議員会において、理事長として理事会を2年間運営するようとの要請を受けました。す

で70年以上の歴史を持つ日本統計学会の先生方には、これまで様々なことをお教えいただいていることを思いおこし、引き受けることといたしました。前々理事長小西貞則先生、前理事長国友直人先生の仕事ぶりを一理事として拝見させていただいておりましたこともあり、身の引き締まる思いがしますが、日本統計学会の発展のため微力を尽くしたいと考えております。

国立大学の法人化にともない、国立大学は現在激変に見まわられており、研究費やポストの配分もいわゆるプロジェクト主義となりつつあります。このような変化は、研究の活性化を生む効果があることは確かですが、他方で息の長い基礎研究には必ずしも適したのではなく、また若い研究者のキャリアパスも不安定なものになりつつあります。私を含めて統計学の研究者の多くは、このようなプロジェクト中心の研究スタイルに必ずしも慣れていないとは言えず、とまどいもあるものと思われ

一方で、統計科学はすぐれて応用的な科学であり、現実の問題を解決して行くことこそが統計科学の役割であると言えます。この意味で、現在起こりつつある変化を逆に絶好の機会としてとらえ、統計科学の長い蓄積を新しい時代の問題解決のために役立てていくことが重要です。隣接分野とも協力し、問題解決型のプロジェクト研究を提案・組織し、若い研究者に活躍の場を提供することによって統計科学の新しい発展をうながすことが求められていると思います。

現在統計関連学会連合という形で統計学関連諸学会の新しい協力関係が模索されておりますが、日本統計学会としても、諸学会の蓄積と特色を生かしつつ、社会における統計科学全体の存在意義を高める方向で協力関係が進むよう配慮していきたいと考えています。

理事長略歴

1952年生まれ。1976年東京大学経済学部卒。1982年スタンフォード大学統計学科Ph.D。スタンフォード大学、パーデュー大学、東京大学経済学部を経て、2001年より東京大学大学院情報理工学系研究科数理情報学専攻教授、現在に至る。

研究分野：多変量解析、統計的推測理論、統計的個票開示問題、などの研究に従事。

3 前理事長退任挨拶

国友 直人（東京大学大学院経済学研究科）

平成14年9月に思いがけずに伝統のある日本統計学会の理事長に選任されてから2年間が過ぎ、ようやく任期を満了することが出来ました。この間、杉山高一前会長、藤越康祝現会長をはじめ、

私からの依頼を快諾されて理事会運営や学会運営にご尽力いただいた理事・幹事のご支援のもとで何とか学会の運営を行ってまいりました。この場をかりましてご協力頂いた皆様方に感謝する次第

です。

この2年間では和文誌の年2回発行など学会誌や会報の充実をはじめ、国際的交流の促進などに特に力を入れてまいりました。また、応用統計学会と日本計量生物学会との連携のもとで統計学会大会を連合大会として2度開催することができました。他学会と一緒に連合大会を行うに当たっては、例えば総会の時間設定でも垣間見ることができるように関係者間で様々な調整を行うことが必要となり、皆様方にはかなりのお手をかけているなどの問題も発生しています。他方、実現された大会自体の方では、多彩なプログラムの配置や活気ある若手コンペ・セッションなど、内容的に

充実することが可能となり、学問的にもプラスの面も多いのではと判断しています。統計学関連の他学会との協調についてはなお今後検討すべき様々な問題も少なくありませんが、近く発足するであろう統計関連学会連合への参加などを通じて、ますます発展していくものと期待する次第です。

幸い、この9月より既に内外で優れた研究者との定評の高い竹村彰通会員が新理事長として選任され、理事会を運営していただくことになりました。私もまた日本統計学会に属する多くの会員の皆様とともに、統計学や統計関連諸科学全体のさらなる発展を目指して協力して行くことを切望する次第です。

4 第9回日本統計学会賞について

4.1 第9回日本統計学会賞（2004年度）

「日本統計学会賞」の第9回受賞者は、

小西貞則（九州大学）

谷口正信（早稲田大学）

森棟公夫（京都大学）

の方々にご決定いたしました。受賞者の皆様には、それぞれ賞状と副賞の時計が贈呈されました。受賞された3名の方々の受賞理由と略歴は以下の通りです。

[1] 受賞者名：小西貞則氏

略歴：1948年生，1974年広島大学大学院理学研究科博士課程数学専攻中途退学，1985年統計数理研究所助教授，1994年九州大学大学院数理学研究院教授

受賞理由：多変量解析，ブートストラップ法，情報量規準の理論的研究において著しい成果を挙げ，統計科学の発展に大きな貢献を行った。多変量解析では，分布の近似精度に関連した変換理論や家族データの分析法の開発，ブートストラップ法においては新しい区間推定法を提案するとともに変換理論を構築した。情報量規準に関しては統計的汎関数にもとづく一般化情報量規準を提案することによって，モデル評価の枠組みを最尤法以

外の広範な推定法に広げるとともに，ブートストラップ情報量規準の理論的基礎やベイズモデルの評価への発展の契機を与えた。

主要業績：Normalizing transformations of some statistics in multivariate analysis, *Biometrika*, 68, (1981) 647-651.

Normalizing transformations and bootstrap confidence intervals, *Annals of Statistics*, 19, (1991) 2209-2225.

Generalized information criteria in model selection, *Biometrika*, 83, (1996) 875-890 with Kitagawa, G.

Bayesian information criteria and smoothing parameter selection in radial basis function networks, *Biometrika*, 91, (2004) 27-43 with Ando, T. and Imoto, S.

[2] 受賞者名：谷口正信氏

略歴：1951年生，1974年大阪大学理学部卒業，1977年広島大学工学部助手，1983年広島大学理学部助教授，1991年大阪大学基礎工学部助教授，2003年早稲田大学理工学部教授

受賞理由：時系列解析における漸近理論，とりわけ高次漸近理論に関して世界的な業績を挙げた。また，線形時系列のみならず，非線形時系列，局所定常時系列，長期記憶時系列などの時系列モデルに対して，局所漸近正規性の観点から，推測理

論，検定理論，判別理論を構築することに多大な貢献があった。

主要業績：On the second order asymptotic efficiency of estimators of Gaussian ARMA processes, *Annals of Statist.*, 11(1983), 157-169.

Higher Order Asymptotic Theory for Time Series Analysis, Lecture Notes in Statistics, Vol.68(1991), Springer, Heidelberg.

Local asymptotic normality for regression models with long-memory disturbance, *Annals of Statist.*, 27(1999), 2054-2080, with M. Hallin, A. Serroukh and K. Choy.

Asymptotic Theory of Statistical Inference for Time Series, Springer, New York, 2000, with Y. Kakizawa.

[3] 受賞者名：森棟公夫氏

略歴：1946年生，1969年京都大学経済学部卒業，1986年京都大学経済研究所教授，2001年京都大学大学院経済学研究科教授，2003年日本学術振興会（併任）

受賞理由：計量経済学における同時方程式モデルの推定と検定問題に関する漸近理論の研究で世界をリードしてきた。特に制限情報最尤法，2段階最小二乗法等の漸近特性の導出及び比較，それらのバイアス修正等を通じた統計的性質の改良等に大きな貢献があった。また二値選択問題の統計分析や非定常な経済時系列データの分析に関する重要な研究を行った。

主要業績：Improving the limited information maximum likelihood estimator when the disturbances are small, *Journal of the American Statistical Association*, Vol.73, No.346, December 1978, pp.867-871.

Approximate distributions of k-class estimators when the degree of overidentifiability is large compared with the sample size, *econometrica*, Vol.51, No.3, May 1983, pp.821-841.

The t test compared with the likelihood ratio test in a simultaneous equations model, *econometrica*, Vol.57, No.6, November 1989, pp.1341-1360.

Switching Orthogonality, *International Economic Review*, Vol.39, No.1, February 1998, pp.171-182,

with M. McAleer.

4.2 受賞者のことば

[1] 受賞者のことば

小西 貞則

このたびは，日本統計学会賞という栄誉ある賞をいただきまして，大変光栄に思っています。これまで長年にわたり学会で研究成果を発表する場を与えていただき，そして議論する機会を提供していただいたおかげで，ここまで来ることができました。ご推薦いただいた方々そして学会員の皆様方に感謝と共に厚く御礼申し上げます。

私が研究論文というものに触れるようになりしたのは1970年代で，多変量解析，特に分布論の勉強を始めることになりました。

1970年代といえますと，T.W. Andersonや塩谷實先生，早川毅先生，藤越康祝先生の著書や杉浦成昭先生，杉山高一先生，長尾壽夫先生の研究からも分かりますように，多変量解析分布論，特に漸近理論に関しては，すでに壮大な理論の山ができておりました。私は，ただ感心しながら闇雲に定理や導出のテクニックを勉強するだけでした。

1980年に統計数理研究所に移りまして，東京という地の利もあり，実に多種多様な研究に接する機会をもつことができるようになりました。また，多様な研究の中で自分自身の研究の位置づけと評価も気になるようになりました。当初研究所では，漸近理論の話にはあまり興味を示していただけませんでした。しかし，何かのきっかけで始めたブートストラップ法の理論構造の研究と様々な統計的問題への応用をセミナーで話しましたところ，これを機に所内の方々が研究室に議論をしに来てくれるようになりました。この中の議論の一つが，情報量規準AICに関するものでした。AICはモデル選択に使う完成された手法と置いておいたので，私自身の理解不足もありまして，一体ブートストラップ法とAICがどのように結びつくのかさっぱり理解できませんでした。どうも最尤法以外の方法でモデルを構築した場合，その評価をどうしたらよいか困っていた様子で，このモデル評価

にブートストラップ法を適用したらどうかと考えていたようです。私の方は、数値的に実行できるものは、解析的に構造を明らかにできると考えていましたので、若い頃に勉強した漸近理論を用いて情報量規準の研究を始め、新たな研究分野の未解決問題へと取り組むようになりました。この頃、時間を忘れて議論したのが、研究所の同僚である北川源四郎氏と尾形良彦氏、そして少し先輩にあたる田邊國士氏でした。いま思いますとこのときの議論が大変役に立ちまして、私自身知らず知らずのうちにモデリングの重要性を認識して、線形から非線形そしてベイズの流れにも何とかついていけるようになりました。

われわれ研究者は、学会という一つの組織を大切にしながら、積極的に他分野の研究に触れて、何が必要とされているか、何を統計科学に求められているかを十分に認識・把握して、教育・研究に生かしていく必要があるかと思います。これまで統計関連学会を通して学んできた知識は、九州大学大学院数理学研究院21世紀COEプログラム「機能数理学の構築と展開」にも生かすことができました。現在、統計数理、計算数理、離散数理の三つの研究プロジェクトを機軸として、「計算機の高度利用による独創的・先端的研究推進の場を確立し、実社会の現実的諸問題に数理的に対処する拠点として機能する。」ことを目指して教育・研究を推進しています。

最後になりましたが、この30年間、多くの先生方にご指導いただき、また励まし助けていただいたおかげでここまで来ることができました。この場をお借りして、感謝と共に厚く御礼申し上げたいと思います。この受賞を励みに微力ではありますが、統計科学の発展に努めて行きたいと思いません。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

[2] 受賞者のことば

谷口 正信

このたび日本統計学会賞という荣誉ある賞をいただきまして大変光栄に思わせていただいておりますとともに、長年続けてきた時系列解析の研究が

評価されましたことを喜んでおります。この受賞を今後の研究・教育の励みにする所存であります。

振り返りますと、いまから約30年まえに、まだ統計学、確率論等のほとんど知識のない状態で時系列解析の勉強をすることになりました。そういった状態でありながら大阪大学の修士課程1年ときのセミナーテキストは、いきなりE.J. Hannanの「Multiple Time Series」という最も難解なテキストに挑みました。これは確率・統計の基礎はいうまでもなく多変量時系列を取り扱っているので多変量解析の基礎も既知として書かれていて、修士1年を修了するころには肉体的・精神的にもすっかりまいってしまって、正直なところ、この様な難解な分野で、私などでは1本も論文が書くことができないだろうと感じました。その後、実際の指導教官が他大学に移られたので、先生のいない状態で何編かの論文を読んでまとめたものを修士論文としました。これはおおよそ論文と言えるようなものではなく、恥ずかしいかぎりのシロモノで10年か15年後ぐらいに自分で自分の保存論文を捨ててしまいました。後年、大阪大学で教鞭をとることがあり、その図書室に卒業生の修士論文コーナーがあって、統計関係者の修士論文が並べられているのですが、眺めてみると私の修士論文はなくなっており、これは、どなたかが私の気持ちを察して捨ててくださったのではないかと思います。思い大変感謝しております。

博士課程進学後も基礎勉強の時代が長く思うような論文が書けなかったのですが、博士課程2年の終わりごろ、時系列のスペクトルモデルの母数推定に最小Hellinger型距離を用いた推測論の論文を書くことができました。これをHannan教授のもとに送ったところ好意的で高く評価してくれたコメントをいただき、このころになって何とか時系列解析の研究者として生きていけるのではないかと思えるようになりました。その後、細々と研究・教育を続け、「時系列30年」に至ったところまでです。私が育った教育環境は必ずしも恵まれたとはいえませんが、私が20代半ばのとき、20代後半から30代前半ぐらいの先輩格の研究者で

すでに国際的業績をあげ、かつ国内にとどまらずグローバルに動きまわっている人が時系列分野だけで何人かおられ、大変な刺激を受けておりました。このような、自分の手に届くくらいで、常にまぶしい思いで見ている先達の存在は私の研究に多大なインパクトを与えてくれたのではないかと思います。

この10年ぐらいのわが国の状態を見回してみますと、統計分野の20代後半から30代前半ぐらいの若手研究者で国際的な顔を持ち、世界中を動きまわっている人がどれほどいるのでしょうか？ときどき不安を感じるときがありますが、今は院生を教育する現場におりますので、今後の自分の課題としては、私が若いときにまぶしい思いで見っていた先輩のような若手研究者を育成することがあると思っております。どうぞ今後ともご支援、ご鞭撻、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

[3] 受賞者のことば

森棟 公夫

学会賞をいただき、大いに喜んでおります。統計関連の研究や教育を30年やってきた時期での受賞で、研究に関する評価だけでなく、いままでの教育も評価を受けている、と一人で納得しております。京大経済の統計といえば蜷川、と直線的に結びつくのが昔からの流れでしょうが、そろそろ違う流れにも気づいて貰えるのではないのでしょうか。賞の推薦者に、研究室の関係者が含まれていることが自慢です。

自分の研究を振り返ると、同時方程式の理論的な研究をしていた頃は、無我夢中でした。あの頃では理論屋の中でも大いに関心を持たれていた問題であったわけです。しかし、我々が同時方程式の研究をしていた時期でも、離散選択は既に脚光

を浴びていました。そして、80年代の半ばからは非定常時系列、90年頃からノンパラ、それに大量データに支えられた金融計量など、世界の関心は移っていきます。

一つのトピックがほぼ完了した印がノーベル賞で、同時方程式はホーベルモ（1989）、離散選択ではマックファデンとヘックマン（2000）、非定常時系列はグレンジャー（2003）、金融計量はエングル（2003）となっています。理論屋にとっては、誰かがノーベル賞を貰った後でそのトピックを研究するのは、しけもく拾いか、セレンディビティでしょう。（「しけもく」は、湿気た吸い殻のこと。アメリカで進んでいく経済理論の論文を読んで、「重箱の隅を楊枝でほじくる」ように、論文種を探すことを皮肉って経済学でよく言われた表現。括弧内も同じ。セレンディビティは、映画とは違い、日常的なものの再検討から、大きな成果が生まれることがある、といった意味を持つ。）

昔のトピックを追いつけることにも意味があるのは、言うまでもありませんが、計量経済では経済分析ありきで、実証分析に使われないmethodは消去されます。（同時方程式にもそういう面がありましたが、なぜか公務員試験に問題が出題される。）計量理論の現状も、数学的に困難な理論は、将来どうなるのかと憂慮します。役に立てばよいのですが、経済分析ありき、という立場からは、理論だけの発展は意味が少なく、また、経済屋さんから嫌われる原因になっています。

これからは、やはり経済分析にとって何らかの有効な方法を一層めざすことが重要でしょう。そのためには、今までのようにデータが降ってくるのを待つのではなく、自らデータを求める態度が不可欠なようです。この方向性がないと、計量経済学はひどく寂れていく事でしょう。

5 日本統計学会小川研究奨励賞

5.1 受賞者と対象論文

受賞者：内田雅之(九州大学大学院数理学研究院)

対象論文：Estimation for dynamical system with

small noise from discrete observations. *J. Japan Statist. Soc.*, Vol.33 (No.2), pp.157-167, 2003

5.2 受賞者および対象論文の報告

吉田 朋広(東京大学大学院数理科学研究科)

統計推測における大標本理論は、精緻な小標本理論(統計的決定理論)を標榜し、古典的体系から統計的実験の直接的な研究へと変貌しました。Le Camによる接触性の概念、局所漸近正規性(LAN)、Hájekの不等式と漸近有効性、畳み込み定理(Hájek, 稲垣)、尤度比確率場の弱収束とその推定量への遺伝といった、尤度解析の一般的構造は、もはや独立性が統計解析の本質ではないことを宣言するものでした。このような枠組みが確率過程の統計にもあてはまるという認識は比較的古く、たとえばG.G.Roussasのマルコフチェーンを扱った教科書は1972年に出版されています。その後、確率過程の統計から局所漸近混合正規性(LAMN)などの新しい概念が生まれ、理論のさらなる一般化を促しました。

数理ファイナンスの浸透もあり、確率微分方程式やセミマルチンゲール(大雑把に言って、拡散過程+点過程)によるモデリングは、応用統計でも抵抗がなくなったと思います。セミマルチンゲールに対する尤度比公式および極限定理の研究の進展とあいまって、その尤度解析が70年代以降発展し続けています。漸近有効性はもとより、ノンパラメトリック統計や、漸近展開法、高次漸近理論が確立し、多くの基本的な問題が解決されました。

近年、離散的な時点での観測値に基づいた確率過程の推測理論が発展しています。離散観測ですが、連続時間の現象を背後に想定するかぎり、観測時間幅が漸近的に小さくなる状況を考えるのが自然で、株価データなどでは現実的な仮定です。厳密な尤度は表現不能となりますが、近似尤度を構成し、対応する推定量の漸近挙動を示すことができます。どのような漸近的状況か詳細に述べる余裕はありませんが、推定量の一致性、漸近正規性、LAMN、漸近有効性、漸近展開など、漸近理論の根本的な問題が解決されています。とくに拡散過程では、ドリフトと拡散項のパラメータ推定量は異なる収束レートで漸近正規かつ漸近直交する事実が80年代から90年代初頭の研究で証明さ

れ、90年代後半は推定関数の改良と漸近有効性が研究されました。最近ではジャンプのある拡散過程に対しても、推定量の構成および漸近正規性、漸近展開まで知られています。この発展には、上記の厳密な漸近決定論を源とする流派の貢献が大きいです。我が国のグループもその一翼を担ってきたといえます。内田雅之氏の今回の仕事もこの系譜に属するものです。

論文では系 X が小さな拡散項で揺らいでいるとき(小さな拡散過程)、離散的な時点 k/n ($k=0,1,\dots,n$)でのデータ($X_{k/n}$)から2つの項のパラメータ推定を行うために、近似マルチンゲール推定関数を構成し、その漸近正規性を証明しました。拡散項が漸近的に消えない場合、全観測時間が一定のときは、拡散パラメータの推定量は漸近混合正規(LAMNの状況)になりますが、ドリフトの推定量は一致性すら持ちません。この場合パス X のランダムネスが極限に残り、それがこの2つの現象の原因となっています。データを見るとドリフトに対して情報を豊富に持っていると思われる状況があり、その表現として、論文では小さな拡散過程を採用し、ドリフトと拡散項に共通のパラメータが入ってもよい一般的な設定を扱っています。エルゴード性のための大域的な構造を仮定することなく、拡散の減少がエルゴード性の代役となり、自然かつ独自の漸近理論が展開されています。証明の技巧は言うまでもありませんが、データ解析にもすぐに役立つ価値ある結果と言えます。

5.3 小川研究奨励賞を受賞して

内田 雅之(九州大学大学院数理学研究院)

この度、小川研究奨励賞を授与され大変光栄に存じます。研究の道に入って今年で10年目となりますが、その道程は決して平坦なものではなく、ましてや今回の受賞など全く予測できるものではありませんでした。

対象論文は拡散過程の統計的推測に対して若干の貢献を目指したものですが、この分野にスムーズに参入できたのは、決して私の独力などではありません。当時助手だった私にすばらしい研究環

境を提供して下さった統計数理研究所の先生方並びに関係者の皆様とセミマルチンゲールの統計解析及び確率解析を一からご指導いただいた吉田朋広先生の助力があったからであり、感謝の言葉もございません。これらの恩恵を賜り、ポテンシャルの低い私にもふつふつと「やる気」が出てきて、研究の方向性が見えるようになりました。

今回賞をいただいた研究に本格的に取り組み始めたのは九州大学に赴任してからのことです。拡散過程の統計解析には離散観測という問題が生じ、連続観測の場合と比べて技術的に少しギャップがあるため、研究成果をなかなか出せずにいましたが、柳川堯先生や小西貞則先生を中心とする九州大学統計グループから激励していただき、自由な雰囲気の中でのびのびと研究をさせていただきました。私のような未熟者が小川賞を受賞する

のは「奇跡」としか思えないかもしれませんが、それは私を取り巻く研究環境、そして研究者の方々からのサポートがあったからだと自分なりに納得しています。「優秀な若手研究者 = 小川賞」はトリビアルな等式ですが、研究者の条件をちょっと緩めて「平凡な若手研究者 + やる気」にしてもこの等式が成り立つ一例が作れたのではないかと考えております。

ここでお名前をお出しすることはできませんでしたが、数多くの先生方からご指導をいただきました。今後もこの賞を励みにさらなる精進をしていきたいと考えております。より一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

略歴：昭和43年9月1日群馬県生まれ。大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程中途退学。博士（理学）。九州大学大学院数理学研究院助教授。

6 統計関連学会連合大会

6.1 実行委員会委員長報告

実行委員会委員長 早川 毅

[1] 実行委員会の構成と開催校との関係

平成16年度大会は、花巻地区に統計関係の会員が実行委員長しか居ないという特殊事情を考慮して、実行委員会委員を全員東京近郊在住者とした。委員会は東京で開催し、開催校の準備状況の報告及び委員会の開催校への指示という形を取った。この為、委員会は現場が直接には見えにくかったかもしれない。逆に、開催校は自由に動けた。

[2] 開催校手持ち金

予算案は前年度の実績をもとに作成されるために項目、金額に強い縛りがあり、開催校の持つ特殊事情で必要とされる緊急な費用や、大会を盛り上げるための開催校の企画が自由に行なえる予算が無い。この為事前に30万円程度をその為に貸与し、事務局へは事後承認を得る形で執行できると良い（すべてのお金を使ってしまうと言うわけではない）。

[3] 現地広報

統計学の社会への認知を高めるためと市民講演会への参加者を増やすために活動をした。

(1) TV、新聞のマスメディアに情報を流した。

TVIテレビ岩手、IBC岩手放送、花巻ケーブルテレビ、岩手日報、岩手日日新聞、河北新聞社

(2) 官庁統計を支える地域の人々の市民講演会への参加を促進するために、岩手県地方振興局花巻支部、花巻市役所、花巻商工会議所、北上市役所、北上商工会議所へ依頼をした。

岩手県庁調査統計課に学会開催の情報を流し、各市町村役場の統計関係従事者への連絡を依頼した。なお、同課より統計啓発のためのポスター展覧会の資料の展示を得た。

[4] アンケート

アンケートを回収箱で毎日回収して、大会終了時に整理した。しかし大会時の運営方法について不満を翌日に解消できなかった。回収資料を毎日報告終了時に簡単に整理して改善すべきであった。

[5] ポスター

ポスターは800枚印刷をし、大会予算内で576個所に送付し、残部は花巻、北上地区へ啓発のために適宜使用した。

6.2 企画委員会委員長報告

企画委員会委員長 柴田 里程

関係各位のご尽力と、開催校富士大学の全教職員をあげてのサポートにより、延べ657名の参加者を得て盛況のうち終了できました。今後の参考までに目視で各会場の出席者概数を調べたのが以下の表です。数が多いセッションが重要ということではありませんので、そのおつもりでご覧ください。

		A	B	C	D	E	F	G
9/3	チュートリアル							250
9/3	シンポジウム							150
9/3	市民講演会							160
9/4	朝コンペ	40	25	55				
9/4	午前	35	35	35	50	25	35	120
9/4	午後I	60	20	36	55	42	35	120
9/4	午後II	45		90	40	80	45	50
9/5	朝コンペ	70	36	45				
9/5	午前	45	30	80	80	35	55	60
9/5	午後I	25	35	55	45	55	26	130
9/5	午後II	30	30	45	35	50	20	110
9/6	午前	60	30	70	50	40	40	40
9/6	午後	40	30	20	20	50	20	70

以下は、今年度の企画を通じて明らかとなったさまざまな課題です。今後精力的に検討を進めていただければと思います。

また、会員各位から積極的にご意見をお寄せいただくことも重要かと思えます。

1. 報告集の事前公開

これまで、座長に限って事前に関覧できるよう取り計らってきましたが、講演数の増加に伴って、座長数も増加し郵送の手間が大変になりましたの

で、今年度は、座長に限ってWebページ経由で事前閲覧できるようにいたしました。一方Q & Aにもありますように、座長以外の参加者からの事前閲覧の要望もありますので、参加を事前登録した会員なら事前閲覧できるようにすることも検討してもよいかもしれません。もちろん、事前閲覧されたくない、あるいは研究成果の公表の日時が重要と思われる会員もおられると思いますので、会員の意見を幅広く伺う必要はあると思います。

2. 報告集のCD-ROM化

報告集はすでにPDF化されておりますので、CD-ROMを作成するのに手間はかかりません。検索機能をつけるのが厄介かもしれませんが、検討に値すると思われます。

3. 報告集原稿受領書の発行

プログラムの編成と報告集の作成がもっとも手間のかかる仕事ですが、今後はこれを企画委員会に一元化し、受領書の郵送など一元的に処理する体制を確立しないと、自分の原稿がきちんと掲載されるのかどうか心配になる会員もおられるのではないのでしょうか。今年度は、講演申し込みは比較的締め切りを守っていただけましたが、報告集に関してはまだまだ行儀の悪い会員がおられたのも事実です。

4. 報告集の印刷上の問題点

今年度は、経費節約のため、印刷所を変えました。その結果、60万円近く節減できたのですが、いくつかのミスも生まれました。校正の体制をもう少し固めておく必要があったかもしれません。(ア)目次の字間が乱れていた箇所がいくつかある。(イ)不鮮明な広告があった(ウ)発行元の明示が抜けていた

5. コンペティション

今年で2回目になるコンペティションですが、運営上の問題がいくつか残っています。(ア)今年はやむを得ずパラレルセッションとしましたが、審査に参加するにはひとつのセッションにとどまらざるを得ないという問題がありました。(イ)共同研究者について。以下のQ & Aにもありますが、連名の報告は認めないという規定とし

たほうがよいというご意見もあります。この点に関しては、企画委員会でもずいぶん議論したのですが、「院生の場合は、なんらかの形で指導教員との共同研究の形をとることが多い。これを無理に制限すれば、形だけ単名の報告となりかねない。かえてこのほうが望ましくない」という結論で今のようになっています。今年の報告をみますと、単名の報告でも、実際は連名としたほうが自然ではないかと思われる報告もありましたし、逆に審査対象者が主たる研究者であったのかどうか疑問の報告もありました。また、審査対象者以外の報告者は発言を控えていただくことを徹底する必要も感じました。

(ウ) 9段階評点について。これを5段階程度にし、ウエイトを事前公開したらという提案もありました。いまのシステムは、基本的にはA、B、Cの3段階でそれにプラス、マイナスをつけるというシステムですが、改善の余地があるかもしれません。

(エ) 分野別にわけたり、投票方式ではなく、審査委員会方式にしたほうがよいというご提案もありますが、連合大会の趣旨と会員の参加意識を高めるといった観点からはいまのように、分野はわけず、投票結果にもとづく授賞という方式のメリットは十分あるのではないかと考えています。記名式の投票ということもあり、投票結果をみると、みなさんよく総合的に判断してくださっているというのが率直な印象です。

6. 企画セッション

昨年度から公募形式の企画セッションを続けていますが、そろそろ企画の事後評価も行う必要があるかも知れません。どの会員にも企画を提案し実施する権利が確保されていることは重要ですが、一方でマンネリになったり仲間内だけの企画セッションになったりする例がないとはいえません。企画した会員へのフィードバックとして、コンペティションと同じように出席者による評価を投票していただくことあたりからはじめたらどうでしょう。

7. 名前のローマ字表記

これはプログラム編成上の問題でもあります。海外の方の名前をどう記述するか、あらかじめ雛形をつくっておく必要があると思います。

8. 参加費

これは企画委員会の権限ではありませんが、いくつかのご提案を伺っていますので、会員各位のご参考までに記しておきます。

(ア) 懇親会費も参加費に含める。これは昨年度の大会から議論に上っていたことですが、懇親会に全員参加するという前提で、参加費に懇親会費も含めてしまえば、結果的に懇親会費をかなり安く抑えられ、懇親会の意義も高まるのではないかというアイディアです。最近では、懇親会に参加する若い参加者も増えているようですので、会費が安く抑えられるなら一石二鳥ではないかと思えます。

(イ) 参加費を2種類に分ける。最近では、学会参加費を所属機関あるいはファンドで負担してもらえることも多くなりました。参加費を個人負担の場合と機関負担の場合では違えたらどうかという案です。もちろん、懇親会費と参加費を一緒に徴収する場合は、領収書を別にするとといった配慮は必要になると思いますが。

9. エクスカーション

国際会議などでは、開催期間の中間あたりで半日ぐらいのエクスカーションが組まれ、参加者の親睦におおいに役立っていると思いますが、いまのスケジュールではとても不可能です。もう一日会期を延長できれば、コンペティションの時間も含め、もう少し余裕のあるプログラム編成ができるのではないかと思います。

10. 写真撮影

ホームページで公開されている集合写真をご覧になればお分かりのように、集合写真撮影に参加される方は年々減少しています。昨年度から写真屋さんによる撮影の代わりにデジタルカメラによる撮影に簡素化させていただいておりますが、それでも参加者への呼びかけ、ひな壇の用意など、開催校の負担はかなりのものがあります。また、参加されない方にとっては手持ち無沙汰の時間と

なるといった問題もあります。そろそろ集合写真撮影は廃止し、かわりに開催期間中のスナップ写真を充実されるといった方向を検討してもよいのではないかと思います。

11. 連合大会の開催形式について

これまでの連合大会では、参加学会の合同大会ではなく連合大会であるという考えから、なるべく各学会の独自性はださないという方針で、企画、運営してきましたが、学会独自のセッションを企画したい、あるいは、順番に各学会に全面的に任せたい企画と運営にしたらどうかという提案もあります。連合が正式に発足したら、このあたりから十分議論を重ねて、実のある連合大会を組織していただきたいと思います。

以下は、大会期間中にお寄せいただいたアンケートのコメント欄に書かれたご意見、ご要望をもとにQ & A形式にまとめたものです。お答えのほうは、小生の個人的な意見も含まれているかもしれませんが、ご了承いただければ幸いです。

「企画、プログラム」

Q. 座長を、幾つかのセッションでは既存のグループを越えて、より適切な方をお願いすると面白い。

A. これだけセッション数が多くなると、一週間ぐらいの限られた期間に、座長をお願いし、時間の重複がないかどうかチェックするだけで精一杯です。ご趣旨はもっともなので、来年度は、すこしでもご意見を反映した企画をしていただければと願います。

Q. オーガナイザーと座長と講演者が同じである場合、少しもったいない(大変でもある)と思う。それぞれ別の方であっても良いのではないか。

A. おっしゃるとおりですが、企画セッションに関してはすべてオーガナイザーにお任せしましたので、今後、オーガナイザーになる方にそのようをお願いする必要があるかもしれません。

Q. 同じテーマの企画セッションを数年続けられ

る時には、同じ切り口に成らぬように新しいオーガナイザーとする事を考えてみても良い。

A. これは、現在の公募形式の問題点の一つでもあります。しかしいっぽう、どの会員にも企画セッションをオーガナイズする権利が保証されていることも重要であると考えます。

Q. パネルセッションを設けた方がより効果的である企画セッションも有ったように感じた。

A. 今年度は、特別講演やパネルセッションが提案されなかったもので、そのまま企画を進行させましたが、今後の課題ではあると思います。

Q. 民間企業の実務家として講演がとても面白かった。

A. 次第に実務家の方の参加が増えてきているのは学会として喜ばしいことと思います。

Q. 非会員が個人負担するには参加費がやや高い。

A. これは、いずれかの学会の会員になっていただくため、意識的に参加費を高く設定してあるからです。この機会にぜひ会員になることをおすすめします。

Q. コンペティションでは教授との連名論文は外すべきである。

A. この点については、企画委員会でもずいぶん議論しました。連名論文を外すことにすると、共同研究にもかかわらず、報告は単一の名前でということになりかねません。院生の場合、本人だけでなく指導教員がなんらかの形で関与しているのが普通ですから、連名でも問題はない、かえって連名でないほうが不自然という場合もあるのではないかと、質問に対する受け答えから、どこまでが本人の仕事なのかある程度は推測できるだろうというのがわれわれの結論でした。コンペティションに関しては、これ以外にもさまざまな問題がありますが、若手の研究を奨励し、よりよいプレゼンテーションをするよう努力してもらおうという効果はあるのではないかと思います。

Q．コンペティションの開始時間が早い。

A．講演数の割りに時間が限られていますので、朝の早い時間をコンペティションに割り当てるのは、やむをえないのではないかと思います。

Q．並行セッションの作り方に問題あり。経済・社会系の並行セッションが多く不満を持つ人が多い様である。一方で組み合わせが悪くてポツカリと穴が空くところが多かった。此れなら並行しないでほしい。数理と経済とを並行してほしい。

A．プログラム作成でもっとも苦労するのがこの点ですが、やはりすべての方に完全に満足していただくことは不可能です。せっかくの連合大会ですから、穴の開いた時間には自分の専門外の講演も聴いてみていただければよかったのではないかと思います。数理と経済を平行してほしいというご意見については、なにか連合大会の趣旨を誤解していらっしゃるのではと危惧します。統計関連の研究者が集まりさまざまな交流を繰り広げるのが連合大会の意義だと思いますので、これまでの分類にこだわってはいせきくの連合大会が生きてこないのではないのでしょうか。

Q．どの発表がどの学会に属しているのかが分かれると良い。

A．上のご質問にも関連しますが、合同大会ではなく連合大会であることの意義をご理解いただきたいと思います。学会の壁を乗り越えて交流を計るという趣旨からは、属する学会を明確にすることが必ずしもよいとは思いません。一方で、各学会の独自性が失われるという危惧もありますが、それは連合大会とは別の会を各学会で独自に開催していただくことによって目的を達成したらよいのではと考えます。

Q．統計教育問題があったが、会期中に教育要素のあるチュートリアルを設けると良い。

A．同感です。教育問題は議論するだけではすみません。すべからく実践が伴わなければ絵に描いた餅といわれて仕方ありません。その意味では、

教育のチュートリアル、会員のスキル向上のためのチュートリアルなど、チュートリアルの重要性はますます高まっているのだと思います。

Q．講演報告集を希望者（学会員）には事前に送付してほしい。

A．参加しない会員にも送付することは、参加費のかなりの部分が印刷費であることも考えると困難であると思いますが、あらかじめ参加登録した方が、Web経由でダウンロードできるようにすることや、CD-ROM化などさまざまな方法を検討する価値はあると思います。

Q．プログラムの頁数が多すぎる。コンパクトにして全体が見やすい様にしてほしい。

A．講演数が多くなったことは喜ばしいことですが、おっしゃる通り、ページ数が多くなりすぎているくらいはあります。ただ、フォントサイズをこれ以上小さくすることも問題があると思いますので、報告集と同様検索機能をつけてCD-ROM化するなどの方策も考える必要があるかも知れません。

Q．6日（月）のセッションは午前が続けて、午前中に終わってほしかった。

A．確かにそのような組み立ても可能だったかも知れません。いずれにしても最終日の扱いはいつも頭を悩ませる点です。

Q．企画セッションを並行セッションにするのは困る。企画の興味あるテーマが重なってしまう。

A．これは企画セッションにかぎらず、一般講演についてもいえることです。なるべく興味が重ならないような配置とするよう努力しましたが、参加者全員の満足を得ることは困難であることをご理解いただければ幸いです。

Q．最終日に早く帰れるのは良かった。

A．最終日も魅力的なプログラムで、かつ遠方の方もその日の内に帰ることができるよう苦心しましたが、そうやっていただけると嬉しく思います。

「開催校」

Q．バスの時間が不適切であった。20分かかると分かっている北上発が8：00と9：00に出る。早すぎ、遅すぎです。その為1コマ目を聞き逃しただけならまだしも、さらにダラダラして、もう1コマを途中からでした。此れが今回最大にして最悪の不満でした。プログラムを作った時点で分かりそうなものだと思います。

A．これらのサービスはあくまでも公共バスの補完の意味で運行を計画しました。公共バスも併せて利用していただければよかったのではないかと思います。

Q．外部の音が有るので、マイクのある会場、無い会場いずれも聞き取れなかった。コメントの質問にはマイクが無かったので聞き取りにくかった。

A．会場がそれほど大きくないのでフロアのマイクを考えませんでした。またG会場は無線が2バンドしか取れないため、2本のマイクしか利用できなかったのは残念でした。

Q．会場への交通の便も悪く、高い参加費を納めているのにお茶のサービス位してほしい。

A．これに関しては、いろいろなご意見があると思いますが、実行委員会ならびに富士大学が懸命にサポートしてくださったこともぜひご理解ください。なお、今回はお茶の予算も組み込まれていませんでしたし、お湯の準備をするのは開催校に多大の負担がかかることもご理解ください。現状ではベンディングマシンで満足いただくしかありません。

Q．館内放送がうるさかったので、改善してほしい。

A．館内放送は、重要な伝達事項に限っていたとおもいますが。

Q．各会場において、部屋の広さに対応したスクリーン(Power point用)を準備してあると助かる。

A．おっしゃる通り小さすぎたかもしれません。なにぶんすべて借り物で固定式ではなかったため

です。

Q．各JR駅から、大会場所までのシャトルバスの情報をWebで事前に公開してほしい。

A．これは8月から公開しておりました。

Q．各会場が広くて良かった。

A．それはよかったです。

Q．全般的に開催校のホスピタリティが素晴らしいの一言です。

A．同感です。

Q．写真撮影の直前にアナウンスが有った方が良かった。

A．アナウンスは何回かあったと思います。

「開催場所の希望」

Q．交通の便の良いところが良い。

A．学会は、人間的なふれあいも大切な要素ですから、効率だけを追求するのは考え物だと思います。

Q．首都圏での開催を希望する。毎年東京固定の方が良い。大都市圏から短時間で移動できるところが良い。

A．一極集中がかならずしもいいとは思いません。特に首都圏以外在住の会員に対して不公平であると思います。

5.3 コンペティションセッション報告

コンペティション担当企画委員 宮川 雅巳

昨年に続き、柴田企画委員長の強力なリーダーシップのもと、2回目のコンペティションセッションを企画しました。対象とする会員は、博士学位取得後2年を超えない若手研究者です。お陰様で、今年も21名と昨年とほぼ同程度(昨年は24名)の参加申し込みがありました。

昨年との大きな相違点は、日程に余裕を持たせるために、3会場2日によるパラレルセッションにしたことです。一方、昨年同様、6つのセッシ

ョンでは、いずれも関連学会の会長・副会長クラスの方々に座長をお引き受けいただきました。当日は、研究を奨励する貴重なコメントをいただきました。ご協力を感謝いたします。

両日とも朝一番のセッションながら、会場には非常に多くの参加者を得ました。パラレルセッションであることから、有効投票については

- 1つのセッションの講演をすべて聴いてすべてに投票したもの
- ただし、講演者ならびに共著者は自身への投票はしない
- 記名投票であること

と規定しました。結果として有効投票数は、1日目 A会場27票、B会場22票、C会場41～44票、2日目 A会場21～22票、B会場22～23票、C会場13～15票でした。数値に範囲があるのは、講演者および共著者の投票によるものです。評価は、昨年と同様に、A：受賞に値する、B：受賞としてもよい、C：受賞に値しない、を基本に、それぞれに+、-をつけた9段階評価を用いました。集計に際しては、9段階の度数をカウントし、参考までに、A+ = 9からC- = 1と換算したときの平均点を算出しました。

最終日9月6日(月)の午前8時30分より、座長を務められた先生方すべてにお集まりいただき、予備選考は一切行わず、集計結果のすべてを提示しました。それを基に、ギリギリの8時55分まで活発な議論を行いました。その結果、2004年度統計関連学会連合大会最優秀報告者には荒木由布子さんが選考され、2004年度統計関連学会連合大会優秀報告者には清水泰隆君、川喜田雅則君、来嶋秀治君、馬場国博君の4名が選考されました(セッション順)。

当初の予定では、優秀報告者は「原則として2名」としておりましたが、優秀報告者に選考された4名の方は、いずれも高得点で優劣つけがたく、かつ、直接聴いていただいた座長の評価も高かったため、少し多めの授賞となったわけです。2名が絶対制約であったならば、短時間では決着しなかったでしょう。アテネオリンピック女子マラソ

ン選考委員会の苦渋が理解されるところです。

一方で、残念ながら受賞されなかった講演にも、たいへん高い評価を受けたものがありました。結果的に、受賞された5名の方は、平均点でも上位5位でした。よって、今回のような高レベルの争いでは、少しでも低い評点があるとそれが極めてinfluentialになるわけです。座長の先生の中にも「将来、論文として評価されたときには、随分違った結果になるだろう」と言われた方がおられました。もともと他人の研究を短時間に、かつ客観的に評価することは難しいことです。有効投票数をみると、聴講したにもかかわらず投票されなかった方もいらしたようです。「よくわからなかったので評価は控えたい」と投票を辞退されたのではないのでしょうか。

私は一部を聴講し、かつ、集計作業をしてみて、感想がいくつかあります。まず、当然ながら、わかりやすい講演は高い評価を受けていました。次に、グループとしての研究の場合、受賞対象者の貢献内容が不明だと、評価のばらつきが大きくなることです。さらには、対象者が博士学位取得2年以内ですから、ポスドクと修士学生ではもともと勝負にならないのでは、という印象をもちました。発表者側にも、企画側にも、そして投票する側にも今後、改善すべき点があると思います。しかし、それらを鑑みても、今回のコンペティションは有意義だったと自賛しています。受賞者の表彰式でのスピーチはどれもたいへん素晴らしく、今年もやってよかったと心底思いました。重ねて、参加会員のご協力を感謝いたします。

なお、有効投票結果は、投票者を匿名とし、パラレルセッションをランダムサイズして配置し、さらにそのなかでの報告順もランダムサイズした上で、以下の形式で公開しております。

<http://ajss.gr.jp/2004R/2004Compe.csv>

ダウンロードするときは、かならずCSV形式でダウンロードしてください。単純に「名前を付けて保存」するとHTMLのタグが最初と最後に入り純粋なCSVファイルではなくなります。Internet Explorerならば上のリンクを右クリックして「対

象をファイルに保存」を選び、保存ファイル名のサフィックスがcsvでなければcsvに書き換えた上で保存してください。第一列は、投票者氏名記入の有無、そのあとの21列が各審査対象者に対応します。A, B, Cは初日の3セッションに対応し、D, E, Fは二日目の3セッションに対応します。会場名とは無関係です。すべての投票用紙を記録してありますので、名前だけで評価の記入のない記録、無記名の評価、各セッションのすべての報告に対する評価がそろっていない記録など、無効な記録も含まれています。なお、報告者本人あるいは共同報告者による評価はなしでも有効な投票としましたし、そのような評価が記入されていたら、それは無視しました。ご自分で解析される場合は各セッションで無評価が1つだけの記録は有効、2つ以上無評価が存在する記録は無効と扱っていただいて問題ありません。

6.4 コンペティションセッション最優秀賞・優秀賞受賞者のことば

[1] 最優秀賞

荒木 由布子(九州大学大学院数理学府)

宮沢賢治のふるさと、岩手県花巻市の富士大学にて開催されました統計関連学会連合大会コンペティションにおいて最優秀報告賞を受賞させていただき、驚きと同時に大変光栄に思います。日頃ご指導頂いております小西貞則先生、貴重なコメントをいただいております東大医科研の井元清哉先輩、そしてゼミで共に勉強しております研究室の仲間や、関係者の方々に感謝申し上げます。

これまでセミナーやシンポジウムでの発表では、先生方の前で発表すると考えるだけで萎縮し、質問にも満足に解答できず、プレゼンテーションは悩みの種でした。コンペセッションには、全てのコメントが発表者にフィードバックされるという大きなメリットに惹かれて思いきって参加しましたが、今回が連合大会への初参加ということもありまして、発表前は大変緊張いたしました。

今回の発表では、正規化基底展開法に基づく関数データ判別モデルを提唱し、シミュレーション

によりモデルの性能を検証すると共に、パイオインフォーマティクスにおける遺伝子構造データの解析を報告いたしました。一般に、経時的に観測・測定された一組のデータを滑らかな関数として捉え、関数集合から有効に情報を抽出する手法は関数データ解析と呼ばれています。提唱した関数判別モデルでは、基底関数展開法を用いたロジスティックモデルを用いて、関数データの事後確率を評価することによって識別関数を構成しました。時間の経過に伴い展開する遺伝子発現レベルを観測した経時的マイクロアレイデータにおいては、時点間の高い相関により従来の多変量解析によるアプローチでは、分析結果に多くの問題点がありました。提案した関数判別モデルではこの問題を動径基底関数に基づく関数データ判別により克服し、更にベイズ型情報量規準に基づくモデル選択により、構築した判別方式の予測誤差を小さくすることができました。

この度の受賞という大変光栄で貴重な体験は、今後の研究への大きな励みとなることと思います。また、聞いてくださっている方々にとってわかり易い発表をする事の重要性を再認識いたしました。

最後になりましたが、このように有意義なコンペセッションを企画・運営して下さった先生方、若手研究者にも発表しやすい雰囲気を創り出してくださいました座長の先生方、審査に参加し丁寧なコメントをくださいました皆様方、そして地元の大会運営関係者の方々に心よりお礼申し上げます。

[2] 優秀賞

清水 泰隆(東京大学大学院数理科学研究科 博士課程2年)

この度は、大変名誉な賞を頂きましてありがとうございます。まずは心より御礼申し上げます。今回の仕事は、近年、ファイナンス等で特に重要になってきた、無限個のジャンプを含む確率微分方程式に関する推測論を扱いました。中でも、離散観測による推測論は現実的な要請があって、特

に重要です。今回の設定では、有限時間内における無限個のジャンプという、奇妙な状況の情報をいかにつかむかという工夫が必要でした。出来上がって見れば、理論の見た目は単純でしたが、その下の数理的正当性を得るための証明には難儀しました。その苦勞と重要性をご理解いただけただければ、これ以上の喜びはありません。

ところで、私は、学会やセミナー等で各地を訪れる時、空いた時間でその土地を探訪する事を楽しみの一つにしています。この度の統計関連学会連大会の開催地岩手県は、初めて訪れたので楽しみではあったのですが、なにぶん広大な面積を持つ土地で、短時間ではなかなか足を伸ばせませんでした。しかし、街道をバスに揺られているだけでも独特の風土を感じる地でありました。

源平の昔、奥州藤原十七万騎と謳われ権勢であった黄金の産地も、その後、維新までの歴史的経緯を知るにつれ、ある種の悲哀を感じずにはおれません。時代の影響を受け続け、転換を迫られてきたという点において、これは統計学の歴史とも似ているような気がしてきました。という、言い過ぎかもしれませんが、統計学も、時代の影響を受け、それに追従する形で発展を遂げてきたと思います。本来の統計学は、現実との関わりがなくしては有り得ないからです。歴史に学ぶとすれば、未来の統計学者たちに、我々がこれから築く歴史に悲哀を感じさせてはなりません。ある意味、時代を先導する統計学となっていくべきでしょう。そのために、微力ながら尽力できれば幸いです。温泉につかりながら、ふとそんな事を考えてしまう雰囲気をもった土地。岩手での統計学会は、やはり大変有意義でした。これからもご指導賜りたく、お願い申し上げます。

[3] 優秀賞

川喜田 雅則(総合研究大学院大学・統計科学専攻)

まず、最初にコンペティションを企画された皆様、審査に参加された方々、そして共に参加した方々に敬意と感謝を表したいと思います。自分はこのようなセッションの存在を強く歓迎します。

その理由を今回の体験において感じたことを通して以下に述べます。それが今後参加されることを検討中の方の参考になれば幸いです。

自分はコンペティションにも統計学会にも初参加ですが、発表前はやはり参加する以上結果が評価され賞に結びついてこそ意味があると自分に言い聞かせました。それにより研究発表へのモチベーションを強めるためです。

そして当日の発表を迎えたとき、まず驚き喜んだのは想像以上の聴衆の人数でした。自分の研究発表を他の多くの人に見てもらえるのは副次的ではありますが大切な利点の一つでしょう。ましてや聴衆自身、審査員をつとめることで嫌が上にも比較的集中して聞いていただけます。これは願ってもない機会でしょう。その結果必然的に産まれる最大の収穫は発表後いただいた有益な質問に加え、その場で得られた会場の人からの研究発表への評価です。その情報から自分の研究発表が目指したレベルに到達しているのか否か、自分が目指したレベル自体が十分だったか否かななどを概察できました。結果的に今回の発表は自分が行った努力に対して過不足のない結果に近いようだと判断できました。この時点でコンペティションへの参加は十二分に報われたと感じました。その後受賞をしたことは無論大変嬉しく思いますが、受賞できなかったとしても上記の理由により同じく満足したことを確信しています。

結果得られた私的見解としては、コンペティションセッションは世の中の多くの物事と同じく、結果の解釈の仕方を誤らず可能な限り有効活用する意志があれば非常に有益な場だといつて良いかと思えます。最後にこのコンペティションが形骸化することなく存続することを強く願って締めくくりたいと思います。

[4] 優秀賞

来嶋 秀治(東大・情報理工・院)

このたび、統計関連学会連大会優秀報告賞を受賞できたこと大変光栄に思います。これまでにご指導を賜りました松井知己先生、ゼミな

どを通してアドバイスを下さった研究室の皆様，そして応援いただいた多くの方々へ心より感謝いたします。今回の報告では，生体情報学などで需要の多いDirichlet分布に対して，Coupling from the Past (CFTP) を応用した新しいランダムサンプリング法を提案しました。この発表に対して，多くの方々の関心が得られたことを大変喜ばしく思います。私はマルコフ連鎖の収束スピードを理論的に算定する研究を行っています。今回用いたCFTPアルゴリズムは，マルコフ連鎖のシミュレーションを工夫することで定常分布に厳密に従うサンプリング（パーフェクトサンプリング）を実現する奇抜で画期的なアルゴリズムとして世界で注目を集めています。実際にCFTPアルゴリズムを応用するには効率的なマルコフ連鎖の設計が鍵となりますが，今回のようにうまくマルコフ連鎖を設計できたことは幸運でもあります。これからも初心を忘れず研究に勤めていきたいと思っておりますので，よろしくご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

[5] 優秀賞

馬場 国博（慶應義塾大学大学院理工学研究科）

この度，現在研究中のテーマ“ The Class of Multiplicative Correlation Matrices ” について発表したところ，思いがけず優秀報告賞を頂きました。このクラスは，確率ベクトルの2つの要素の相関が，母数ベクトルの積，またはそれに負号をつけた形で表される相関モデルで，その簡潔さからニューロサイエンスの分野など実際にも広く用いられています。このモデルは，これまで特定の確率分布を仮定した下での研究は行われていたましたが，分布を仮定せずこの2次モーメントモデルだけから理論を構成したのは我々が初めてだと考えています。相関を母数ベクトルの積で表せるか，負号をつけるかで2つのクラスに分けることができますが，両方で共通な性質もあれば各々に固有な性質もあり，単純なモデルでありながら意外な奥の深さに驚いています。

どうせ発表するのであれば多くの方に注目していただければ，その分準備にも気合が入るであろうと

思い，コンペに参加させていただきました。発表方法を工夫するなど，自分の報告にいい意味でのプレッシャーがかかり良い経験でした。また自然と他のコンペ参加者の報告を熱心に聞き，報告内容や発表方法も勉強できました。私はやや歳をくっておりますが（でも参加資格は満たしています），若手研究者が集まっているセッションなのでお互い切磋琢磨できる契機にもなりました。

共同発表者でもあり指導教授でもある柴田里程先生の適切なご指導に感謝申し上げますとともに，研究を支えて下さっている研究室のメンバーや渋谷政昭先生，清水邦夫先生にもお礼を申し上げたいと思います。この受賞を励みに，研究により精進していきたいと思っています。

6.5 チュートリアルセミナー報告

塚田 良雄（アベンティスファーマ）

「データマネジメントのプロセスとシステム
- 臨床試験を例として - 」

臨床試験を例として，データマネジメントのプロセスとシステムの概略を臨床開発のグローバル化やデータマネジメントを取り巻く最新の動向を視野に入れて紹介することにより，参加者にデータマネジメント業務の実際とその重要性を改めて認識あるいは理解してもらう事を目的として，日本製薬工業協会（製薬協）の協賛の下に本チュートリアルセミナーを企画・開催した。

発表は，先ず，藤本氏（日本シエリング）が，臨床試験データの特徴とともに，臨床試験データベースの構築における必要条件と考慮すべき事項を標準化に関する世界的動向も踏まえて紹介した。次に，吉本氏（キリンビール）は，GCP（医薬品の臨床試験の実施の基準）の要件を満たしたデータマネジメント業務と，症例報告書の作成からデータがクリーニングされ解析可能なデータとして解析担当者に渡されるまでのプロセスについて説明した。最後に永谷氏（日本イーライリリー）は，臨床試験データ収集に関する最近の話題の1つである，EDC (Electronic Data Capture) について，

その概略と期待する効果や効果的運用のための課題をGCP等の要求事項も考慮に入れて紹介した。

3名の発表者はいずれも製薬企業において10年以上に亘りデータマネジメント業務に携わっており、それぞれの実務経験と最近の製薬協での活動成果を基にした具体的な発表内容であった。

研究の目的に合致した質の高いデータがあって初めてデータに基づいた正しい統計学的結論が下せる訳であり、今回のチュートリアルセミナーがこの事を再認識する場として位置付けられ、統計家のデータマネジメントに対する理解が一層深まれば幸いである。

また、今回の発表では、臨床開発のグローバル化への対応や業務の効率化を目指してデータマネジメント領域で進行している新しい試みや業界横断的な活動等の最前線の動きも幅広くカバーした。この点からも、参加した統計家のみならずデータマネジメント担当者にとっても有益な内容であったものと確信する。

参加者は予想を上回る二百数十名に及び、データマネジメントに対する関心の高さが窺えた。

6.6 市民講演会報告

企画担当 美添泰人（青山学院大学）・柴田里程（慶應義塾大学）

2004年9月3日から6日まで花巻市の富士大学で開催された統計関連学会連合大会の機会を利用して、9月3日に「市民講演会」が開催された。

市民講演会では従来からさまざまな主題が取り上げられてきたが、今回の主題は「統計データが示す地域経済活性化の方策」と設定した。これは、連合大会開催の地元である花巻市、北上市およびそれぞれの商工会議所から、地域経済活性化という視点で、統計の利用可能性を知りたいという希望が寄せられ、そのような期待に応えるために、関連学会が協力して実施したものである。

企画に当たっては、学会全体の世代構成などを考慮に入れながら、講演内容を検討した。その結果、まず、地元の企業を対象として富士大学が実施した企業アンケート調査から明らかにされる内

容を紹介し、続いて、その調査に比較的新しい分析手法を適用して得られた情報を対照する形で紹介することとした。最後に公式統計の中で地方に関する情報を得ることが可能な主要統計とその利用方法を紹介し、全体として調査と分析、理論と実際のそれぞれの側面から、総合的に統計データの果たす役割を提示することを計画した。

当日は、企画担当者の一人である美添が座長を務め、趣旨説明の後で3人の講師による講演が行われた。具体的な内容は以下のとおりである。

講演1。「東北域内産業集積地における企業アンケート調査の概要」武井安彦（富士大学）

この講演では、アンケート調査の目的と方法を紹介した後で、業種、資本金、従業員数、営業利益、製品、経営資源などの回答した企業の基本的特徴の要約、および「地域企業の研究開発の状況」が紹介され、それに基づいて、循環型・高齢化社会への対応などの視点から、地域企業の求めるものと求められる姿が論じられた。

講演2。「新事業支援強化に関するアンケート調査からわかること」熊坂夏彦（慶應義塾大学）

ここでは上記のアンケート調査について、さまざまな角度から統計的解析を行った結果が紹介された。特に、研究開発やITの導入状況などの要因が「市場公開の意思」をどのように左右するかを探索した結果から「自社独自の研究開発に力を入れつつ積極的に外界との交流を図る企業が市場公開に対して意欲的である」という解釈が導かれるなど、グラフを中心とした分析を通じて、統計的な手法の有効性を平易に解説することに成功したと思われる。やや専門的な内容を含むので聴衆の反応が注目されたが、会場からの評価も好意的であった。

講演3。「地域統計とその活用」大林千一（総務省統計局）

最後の講演では、地域の社会・経済状況を統計データの面から把握する手法が示された。特に国

の作成する主要な統計から花巻市，北上市を中心とするさまざまな情報の活用方法が多く図や表を用いた例を交えながら紹介された。今回は，官庁統計の中心的な組織である総務省統計局において，現職の統計局長という多忙な立場にあるにも関わらず，大林氏自らが提示資料を作成されたことのであった。わかりやすい内容であったことから，聴衆の反応も最も活発であった。

午後5時30分開始という比較的遅い時間にもかかわらず，200名近い聴衆を前にして熱のこもった講演会となった。参加者の中には市民や企業関係者の他にも，官庁統計の企画や実施に携わる統計実務家など，市や県からも統計関係者の姿が見られたことは，今回の企画が評価されたものと考えてよければ，企画担当者の責任はある程度は果たせたということだろうか。

最後に，講演者はもちろん，会場の準備など献身的な協力をしていただいた富士大学の関係者，資料の準備などに気配りを頂いた関連学会の事務局関係者に対して，心より感謝の意を表したい。

6.7 シンポジウム報告

シンポジウム「事例中心にみる統計科学の現代的価値」の報告

柳川 堯氏（久留米大バイオ統計センター）

統計関連学会連合大会初日の9月3日に標題のシンポジウムが日本学術会議統計学研究連絡委員会と統計関連学会連合大会との共催で開催された。出席者は約210名であった。まず，竹村彰通氏（日本学術会議統計学研究連絡委員会委員，東大教授）から，統計科学は100年の歴史を持ち数学，経済学，工学，医学，心理学と関係しながら汎用的な科学的手法を開発してきたが，計算機技術の発展の中で多量データが蓄積しその解析法をめぐって，若い計算機科学の中で枠組みにとらわれない自由な発想が生まれてきている。統計科学も変化していかなければならない。統計科学の現代的価値を改めて考えてみることにより今後の発展をはかりたいというシンポジウム開催に当た

っての挨拶があった。挨拶の中で，大学の法人化の中で研究費の配分がプロジェクト主義に変化したこと，プロジェクト主義には弊害もあるが，統計科学はその流れに対応し現実の問題を取り上げていく必要があること，プロジェクト主義の中で若い研究者がポストドクとして採用されているが研究者の養成という観点からその後のポストも考えていかなければならないことなどの指摘もあった。次いで柳川 堯（日本学術会議会員）が本年4月に一部改正された日本学術会議法に関して新日本学術会議会員や連携会員の選出方法等を紹介し，安田裕司氏（東京三菱銀行オペレーションサービス企画室調査役），鎌谷直之氏（東京女子医大膠原病リュウマチ痛風センター所長），北川源四郎氏（統計数理研究所所長）による講演が行われた。3氏の講演概要は以下のものであった。

安田裕司氏「金融機関における統計科学の価値」

金融工学，ファイナンスの分野で統計学が重要な役割を果たしていることはよく知られている。しかしながら，経営管理・リスク管理の場面での役割や価値についてはよく知られているとはいえない。安田裕司氏は，金融機関における総合リスク運営・管理について解説し，その各場面において統計的方法や考え方がいかに用いられているか，またどのような重要な役割を果たしているかについて，現場の視点から紹介した。金融機関には，信用リスク，市場リスク，事務リスク，流動性リスクなど多岐・多様なリスクがあるが，安田氏が焦点をあてた総合的リスク運営・管理とは，さまざまなリスクを特定して，可能な限り統一的尺度で統合化し，計測・コントロール・モニタリングし，そのプロセスを検査・監査することによりリスクに見合った収益の安定的計上や適正な経営資源の配分を目指す総合的プロセスを指している。話題として，リスクを織り込んだ経営指標，信用リスクの計量化，予想損失と潜在損失，プライシング政策，掛け目割れローンなどが取り上げられた。例えば，掛け目割れローンでは，多変量モデリングでスコアリングを行い担保不足だが信

用度の高い客にローンを出すなど、各話題に関して統計学の興味深い使い方や重要性が紹介された。講演の最後に、金融機関現場からのメッセージとして、現場ではいつも定量vs定性、データvs経験、science vs artが問題になり、両者のバランスをとっていくことが極めて重要で、バランスがとれる人材が必要であること、そのためには高等学校や大学での統計教育をしっかりと欲しい、また社会人の再教育をも行う必要があるというアピールがあった。

鎌谷直之氏「統計科学における遺伝学の位置づけ」

まず、連鎖解析の仕組みが解説された。連鎖解析とは、複数の座位の位置関係を家系の観察データに基づいて選定し、特定の表現型に関与した遺伝子を特定する方法である。家系の観察データが得られたときその尤度を遺伝の法則だけで記述しパラメータの推定・検定を行う。このとき、尤度関数は 10^{100} 個のオーダーの和で記述されるのでまともには計算できない。様々な工夫が行われていることが紹介され、その一端が示された。次に、日本における腎不全が起こって痛風がおこる家系を対象として講演者が行った連鎖解析が紹介され、その結果uromodulin遺伝子の突然変異が原因であることが解明された事例が示された。原因遺伝子が突き止められれば、治療法の開発や診断法の開発が可能となる。新しい遺伝子の発見はもはや重要ではない。今後は、特定の遺伝子と表現型が関係するという証拠を得ることこそが重要であり、その証拠を与える遺伝学と統計科学がますます重要であるとの指摘があった。最後に、連鎖解析にはパラメトリック解析とノンパラメトリック解析があること、また、連鎖解析のほか連鎖不平衡解析、ハプロタイプ解析、個人のデュプロタイプ解析などもあり海外ではこれらの話題が急速に進展し目覚ましい成果が上がっているが日本では遺伝学、統計科学のどちらの分野も教育・研究体制が極端に弱い。これからの日本では、遺伝統計学が極めて重要になる。遺伝学と統計科学は協力して教育・研究体制充実を図るべきであるというこ

とが力説された。

北川源四郎氏「情報社会における統計学の役割」

まず、独立行政法人化の下で大学共同利用機関の機構化が紹介され、その中で統計数理研究所は枠組みとして今後の学問の中心としての立場を得たこと、今後はこの枠組みを利用してどのような社会的貢献を行い新しい成果を上げるかが問われているという統計数理研究所の簡単な現況紹介があり、本論に入った。本論の基調は、21世紀の特徴を情報社会、リスク社会と位置づけた上で、統計科学はこの二つを重点的にとらえていく必要があるという主張であった。この主張を裏つける説得的な興味深いいくつかの話題が語られた。情報化社会のデータ環境の激変として、物理実験・観測データ、POS・マーケティングデータ、金融高頻度データ、DNAデータ、環境データ、防災関連データを例に上げ、そのどの分野でも1日ギガバイト単位の多量データがたまること、このような大量データとの出会いは人類にとって初体験であり、大量データから情報を抽出して将来予測、知識発見をおこなうための統計数理の方法がいま最も必要とされていることが指摘された。また、大量データの解析ではデータからの情報と、データ以前の知識を統合してモデル化を行うことが重要であることが指摘され、講演者が開発した状態空間モデルを適用した地震データの解析など興味深いいくつかの事例が紹介された。事例の中で、大量データのモデリングでは解析的に解けないものもありMCMC、Bootstrapなどの数値的方法も必要であるとの指摘もあった。リスク社会については、国の重点領域として安心・安全な社会が取り上げられており、そこでは気象・地震、金融・経済、生命・環境、安全性（医薬品、食品、交通）巨大複雑システムなどのリスク評価・管理が問題とされている。不確実性モデリングとリスク管理という立場から、統計科学にとってもこれらの問題は重点課題として取り組んでいく必要があることが強調された。最後に、アメリカNSFの動向が紹介され、NSFの6つの重点領域の中に

Mathematical Scienceが入っておりその強調分野として1. 巨大データに関する数学的および統計的挑戦, 2. 不確実性の管理とモデリング, 2. 複雑な非線形システムのモデリングが取り上げられ

ていることが紹介され, 統計科学は今後ますます重要になっていくと確信しているという言葉で講演が締めくくられた。

以上

7 2005年度統計関連学会連合大会について

事務局

2005年度統計関連学会連合大会を, 今年度と同じく, 日本計量生物学会, 日本統計学会, 応用統計学会の3学会の連合大会として, 2005年9月中旬に, 広島地区(会場: 広島プリンスホテル)で

開催することが決定されております。その詳細については今後の統計関連学会連絡委員会にて決定されることになっており, 次号に関連記事を掲載する予定です。

8 国際会議参加報告

8.1 COMPSTAT '04

伊原 一 (統計数理研究所)

COMPSTAT '04の紹介(チェコ共和国)

今年8月にヨーロッパで開催されたCOMPSTATに参加する機会があったので, ご紹介します。

国際的な統計関連の学会がいくつかある中で, 最も大きなものはISI(国際統計協会)であり, COMPSTAT '04はこのISIの分科会であるIASC(International Association of Statistical Computing)の第16回ヨーロッパ大会として, 2004年8月23~27日にチェコ共和国で開催された。

今回の大会には各国から572名が参加し, 合計212の発表が行われた。内容は計算統計(Computational Statistics)の趣旨からいざれもコンピュータを用いた実証的な分析や手法研究, アプリケーション開発などが中心となっており, 多くのセッションの中でも特に招待講演はレベルが高く興味深いものが多かった。セッションは複数が平行して開かれるため, 参加者は自分で興味のあるテーマを選んで聴講した。

コントリビューションのテーマをセッション数で見ると, 時系列分析(3), ロバスト性(3), クラスタ分類(3)がそれぞれ3セッション, ブートストラップ(2), アプリケーション開発(2), ファンクショナル・データ(2), 官庁統計

(2)がそれぞれ2セッションずつ開かれ, 発表数が多かった。他のテーマは概ね1セッションずつであった。

日本からの参加者は46名, 発表数は21で, 最も多かった並列計算処理(3), アプリケーション開発(3), ファンクショナル・データ(3)のセッションでそれぞれ3つ, 生物統計(2)で2つの発表が行われ, 他にもデータ可視化, ニューラル・ネットワーク, ブートストラップ, 教育, アルゴリズム, 自己回帰, 機械学習, 平滑化, その他の分野でも発表が行われた。

大会最終日には6つの研究発表についてERS若手研究者優秀賞が表彰され, 金融ポートフォリオ, 大気圏放射能, 食料含有の有害物質についてそれぞれ実証研究を行ったものと, 高次元空間分析, ツリー分析, ブートストラップについてそれぞれ主に手法研究を行ったものが表彰された。また, ポスターセッションの4つのポスターについて賞が贈られた。

IASCにはヨーロッパ地域(ERS)とアジア地域(ARS)の2つのセクションがあり, COMPSTATは1974年にオーストリアで第一回大会が開催されて以来, ヨーロッパでERSの主催により2年おきに開催されてきている。次回のCOMPSTATは2006年にローマで開催される予定である。

ISIには、IASC（国際統計計算学会）、IASE（国際統計教育学会）、IAOS（国際官庁統計学会）、IASS（国際統計調査学会）にベルヌーイ学会とアービン・フィッシャー学会を加えて6つの分科会があり、ISI本体の大会は2005年4月にオーストラリアのシドニーで開催される予定となっている。COMPSTAT '04及びISIの詳細については、それぞれ下記のホームページを参照されたい。

・COMPSTAT <http://compstat2004.cuni.cz>

・ISI <http://www.cbs.nl/isi>

COMPSTAT '04番外編（プラハ）

COMPSTAT '04が開催された8月のチェコ共和国は観光シーズンの真最中で、大勢の観光客で賑わっていた。開催場所は首都プラハの中心部にあるカレル大学で、すぐ近くには観光の目玉となっているカレル橋とプラハ城がある。カレル大学自体も歴史のある建物で、大会開催中に観光客が勝手に入ってきてしまうのを防ぐため、休憩時間には会場に鍵がかけられてしまい、発表者が事前にPCのセッティングができずに苦労していたようである。

会場近くにあるプラハ城は見晴らしの良い丘の上に建てられており、プラハ城から街全体を一望することができる。プラハ城の中心には歴史的な大聖堂があり、定時には衛兵交代が見られる他、城内の一角にある小説家カフカのアトリエも有名な観光地となっている。このプラハ城の宮廷庭園でCOMPSTAT主催の夕食会が開かれたのは印象的であった。

プラハはヨーロッパの中でも戦争による破壊を受けていないほとんど唯一の都市で魔法の都市と呼ばれ、大聖堂や古城などの歴史的な建物がそのまま残されている。COMPSTATでは大会プログラムの一つとして卒業生によるクラシックコンサートが行われたが、カレル大学のコンサートホール近くにはティーン教会という大聖堂があり、中世の古城のようなノスタルジックな外観が観光客を魅了していた。また、大会プログラムに郊外の古城へのエクスカージョンが盛り込まれており、

観光ガイドブックにも載っていないような古城を訪れることができたのは嬉しいイベントであった。

プラハ市街の主な交通手段は地下鉄か路面電車のトラムであるが、やはり街中どこでも行けて外の景色も見えるトラムが便利である。トラムの料金は約50円で平日1時間、休日90分乗り放題のチケットを購入できる。治安は比較的良く、夜でも街中を歩くことができたがそれでもやはり注意は必要で、参加者の中にトラムで財布をすられる被害にあった人がいたようである。

プラハの物価はEU諸国に比べると割安であり、街中のレストランでも600円程度から牛肉やカモのメインディッシュをオーダーすることができる。食事にはチェコのビールが最も合うので地ビールのパドワイザーをジョッキでオーダーしたが、有名なこのビールはルーツがチェコ出身のビール職人によって作られたものであり、現地では味も濃くてコクのあるヨーロッパ風のビールであるのには驚かされた。

チェコ共和国は2004年にEUに加盟したばかりで通貨統合がまだ行われていないため、現地ではチェココルナ(CZK)が用いられている。おみやげにはウォッカがお勧めで、ボトル一本千円程度で購入することができる。また、チェコのチョコモ街中の売店で一箱300円程度で買うことができる。

プラハへは日本からの直行便が無いいためフランクフルトやパリを経由して行くことになるが、片道14時間以上かかっても訪れる価値のある町である。COMPSTATは充実した会議であったが、次にプラハを訪れる時は長期滞在してのんびり過ごしてみたいものである。

8.2 IFCS2004に参加して

馬場 康維（統計数理研究所）

2004年7月15日から18日にかけて、シカゴにあるIIT(Illinois Institute of Technology in Chicago)で開かれたIFCS2004に参加した。IFCS(International Federation of Classification Society : 国際分類学会連合) は日本分類学会をはじめとして、各国の分類学会が参加して1985年に設立したもので2年に

一度の国際会議を開いている。第1回は1987年アーヘン（西ドイツ）で、以後、シャーロットビル（アメリカ、1989年）、エジンバラ（イギリス、1991年）、パリ（フランス、1993年）、神戸（日本、1996年）、ローマ（イタリア、1998年）、ナムール（ベルギー、2000年）、クラコー（ポーランド、2002年）と続き、2004年の今年、シカゴで開催された。神戸の時に1年ずれたのは、阪神・淡路大震災の影響である。

今回の参加の主目的は一昨年夏にご逝去された林先生を偲ぶ、Memorial Session of Chikio Hayashiで講演をすることであった。このセッションは、IFCSの創設に努力され、また、神戸大会の当時は、日本分類学会の会長であり、IFCSの会長でもあった林先生のメモリアルセッションということで、統計数理研究所大隅昇名誉教授がオーガナイザーになり開かれたものである。

会場では、2台のプロジェクターを用いて、林先生のプロフィールの紹介映像を流しながら、ローマ大学のAlfredo Rizzi教授の司会で各講演者から報告が行われた。そのタイトルを紹介する。

1 . Noboru Ohsumi (The Institute of Statistical Mathematics) , Memories of Chikio Hayashi and his Great Achievement

2 . Ludovic Lebart (ENST) , Validation Technique in Correspondence Analysis

3 . Hans-Hermann Bock (Aachen University of Technology) , Classification in the Life Span of Chikio Hayashi

4 . Yasumasa Baba and Noboru Ohsumi (The Institute of Statistical Mathematics) , Chikio Hayashi and Data Science in Japan

大隅先生はこれまでの林先生の業績とその人となりを紹介した。Lebart教授は数量化理論とコレスポンデンスアナリシスのかわりを述べ、コレスポンデンスアナリシスにおけるexternal validationとinternal validationとについて紹介した。Bock教授は、林先生が活躍した過去40年間を振り返り、それぞれの時代に発展してきたクラスター分析法について概観した。私は、コレスポンデ

ンスアナリシスより20年近く前に数量化が誕生していることを踏まえて、1950年代の数量化理論誕生の話を中心に、戦後の標本調査の研究が日本人の国民性の調査、国民性の国際比較研究CLA (Cultural Link Analysis) と発展してきた様子を紹介した。

さて、大会全体を概観すると、大会開始前日、14日には、4つのショートコースが行われ、15日から18日は特別講演、招待講演、一般講演あわせて165の講演が行われた。さすがにクラスタリングに関係する発表が多いが、発表は統計一般の広い範囲にまたがっている。フランスのDiday教授を中心とする人々は、相変わらずsymbolic data analysisの研究をしているようで久々にIFCSに参加して懐かしい感じがした。functional analysisで有名なJim Ramsy教授の特別講演、“ Modeling the Evolution of Disease Symptoms with Principal Differential Analysis ” を聞きたいと思っていたが、時間があわなくて聞き逃してしまったのが残念である。

大会事務局の中日での発表では、200人を超える参加者のリストが示されていた。国際会議という後半は参加者が減ることがままあるが、今回は、最後まで参加者が減らなかったという印象である。

IFCS大会には若手研究者の旅費の補助を目的としたChikio Hayashi Travel Awardがあり今回は、9名の若手が推薦され、日本からは、Hodaka Numasaki, Teppei Shimamuraの両氏が受けた。これは、TAP (Travel Award Program) と呼ばれていたが、創設に尽力された林先生に敬意を表して今回から標記の呼称としたとのことである。

また、Springerから出版された今大会のプロシーディングスには、“ This book is dedicated to the memory of Professor Chikio Hayashi..... ” と記されている。IFCSにおける林先生の存在感をあらためて感じた次第である。

大会初日のウェルカムパーティーは、ミシガン湖のクルージングで湖上でワインを飲み、最後の締めくくりClosing Sessionはセントアンドリュー

ス大学のDavid Wishart教授の、“Classification of Single Malt Whiskies by Flavour”で、講演者も聴衆もウイスキーグラスを持ちながらのセッションであった。その後のテイastingがそのままフェアウェルパーティーの様で、ウイスキー好き（あるいは単なる酒好き）の参加者は並んだ銘酒を堪能したようである。

8.3 Celebrating Statistics: Cox 80th Birthday Meetingへの出席を機にして

赤平 昌文（筑波大学）

国際的に著名な統計学者のD.R. Cox卿の80歳記念として企画された会議が、2004年7月14日から17日まで、スイスのチューリッヒから南西へ列車で約1時間45分行ったところにある湖に近いヌシャテル（Neuchatel）大学で開催された。参加者は約100名で、とても和やかな雰囲気であった。

私が、初めてCox先生にお会いしたのは、1982年に約1ヶ月間ロンドンのImperial Collegeに滞在したときで、その当時、その統計グループは強力で、当時、若手のR. Coleman, P. McCullagh, B.D. Ripley, R.L. Smith, H.P. Wynnの各氏、そして中堅のA.C. Atkinson, A.M. Herzberg, A.F.S. Mitchell, E.J. Snellの各氏らがスタッフとして活躍しており、また、ポストドクでN. Reid氏も滞在していて、それぞれ活発な研究を行っていた。その雰囲気は、とても家族的で、たとえば、ロンドン郊外にあるRothamsted農事試験場への訪問が企画され、Cox先生をはじめとするスタッフ、大学院生とともに私も参加した。そこでは、かつて所属していたR.A. Fisherが実際に実験計画を実行した畑の前でその研究成果を含む説明を受け、そして彼を記念した‘Fisher Building’でJ.A. Nelder氏とその門下の研究者の講演を聞き、その後、当時健在だったF. Yatesも参加されたレセプションが催された。しかし、Imperial Collegeのその統計グループもCox先生が退官された後は、そのスタッフもほとんど他大学等に転任してしまった。

さて、会議では、Cox先生に縁のある方々の講演が多く、印象に残ったものは次の通りである。

P. McCullagh氏は回帰モデルの交換可能性の定義とその意味、そしてクロスオーバー・デザインについて話し、B.D. Ripley氏はコンピュータ計算が統計学をどのように変えたかということ、J.W. TukeyのEDAから始めて最近の大量時間を要する計算機指向手法、データマイニング等を話し、より良い統計計算というものは、従来には思いもよらなかった解析を実現することでもあると結論づけた。一方、P. Hall氏はJulian Simon（1993）の言葉を引用して、計算機指向の統計学はこれまでの数理統計学の知識の価値を減ずることになりかねないと述べた上で、2つの具体的な問題を取り上げ、これらが数論や代数幾何の知識を用いて理論的に解けることを示唆した。また、A. Azzalini氏は、ノンパラメトリック密度推定法を用いて、自国（イタリア）のオリーブ油のデータのクラスター分析結果を紹介した。N. Reid氏はCox & Hinkley（1974）の著書“Theoretical Statistics”の内容とその後の発展について述べ、特に、尤度推測、条件付推測の有用性等の最近の成果を紹介した。O.E. Barndorff-Nielsen氏は確率分布の無限分解可能性および量子確率論に関するサーベイを行い、その際に数人の日本の確率論研究者の寄与にも言及していた。さらに、S. Zeger氏の生物統計におけるCoxモデルの将来への展望、I. Rodriguez-Iturbe氏の降雨量と植物への影響、N. Shephard氏の計量経済、統計、ファイナンスの関連、D.A.S. Fraser氏らの観測尤度に基づく母数ベクトルに対するp値についての講演があった。

Cox先生は80歳になられてもなお意欲的に仕事をされており、その真摯な姿勢に学ぶべきことが多々あると感じた。会議の他にも、ヌシャテル城でのカクテルパーティ、デュ・ペイロの館でのディナー、ヌシャテル湖の遊覧、博物館、美術館の見学等も企画された有意義な会議であった。また、私としては、かつて出会い、今や世界の第一線で活躍している友人達と旧交をあたためることもでき、とても充実した時を過ごすことができた。

9 会長候補者推薦のお願い

本年秋には次期会長（2005・2006年）の選挙が行われます。本学会では、会長候補者を会員から推薦していただくことになっております。この趣旨は、一般の会員の参加意識を高めることにあります。多くの会員の皆様から推薦をいただけることが前提ですので、積極的にご推薦くださるよう、宜しくお願いいたします。

1. 推薦者は正会員または名誉会員とし、同一の候補者を複数の会員が連名で推薦することも可能です。
2. 会長候補者を推薦するには、推薦者の署名捺

印、推薦理由書、履歴書、業績リスト、などを事務局へ提出して頂く必要があります。詳細は事務局までお問合せください。

3. 今回の会長選挙のためには、2004年11月10日までに、所定の書類を事務局に提出することが必要です。

問合せ先：日本統計学会事務局

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所内

電話：03-3442-5801，e-mail：jimu@jss.gr.jp

10 研究部会新設公募

統計学の研究活動を助成するため、日本統計学会が1954年に研究部会制度を設けて以来、これまでに多くの研究部会が誕生し、統計学の発展に寄与して参りました。この制度は、公募制をとり、原則として年1ないし2件が評議員会の承認を得て発足します。継続期間は2年間、助成額は1部会につき10万円で、部会設置期間終了時には、会員への研究成果の公表と評議員会への事務報告が義務付けられています。また、研究会の開催を本学会のホームページに掲載することになっています。

募集は毎年行いますので、前年採用された1ないし2部会とあわせて、1年度中に4つから5つの部会が開かれることとなります。（ただし、平成17年度に活動を予定する研究部会は現在0件と

なっています。）

今年も研究部会を公募いたしますので、ふるってご応募ください。

締切日：2004年11月10日

応募先：日本統計学会事務局

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所内

応募書類の書式などは事務局までお問い合わせください。採用は、11月13日に開催される評議員会にて協議の上、決定いたします。

なお、研究分科会（設置期間4年間）については随時募集しております。こちらにも積極的にご応募ください。研究分科会の趣旨等については会員名簿（2003年12月）の記載および会報第113号（2002年10月）の記事をご参照ください。

11 学会賞の創設

11.1 新しい賞の概要

日本統計学会会長 藤越 康祝

日本統計学会として日本統計学会統計活動賞と日本統計学会統計教育賞が、2004年9月3日に開

催された評議員会で別記の通り決定された。

本学会には、これまで日本統計学会賞と日本統計学会小川研究奨励賞が制定され、受賞者を表彰して来ている。前者は研究業績を讃えて個人に与

える賞であって、これまでは主として比較的長期間にわたって実質的に大きな貢献をした人が受賞している。後者は、統計学会誌に掲載された40歳以下の会員の論文を顕彰する賞である。これに対して今回創設された2つの賞はそれぞれ、統計の分野における顕著な活動と、統計教育における顕著な業績に対して個人又は団体を顕彰する賞である。

受賞対象は、学会の賞として十分な権威と名誉を維持したいこともあって、各賞とも毎年2件以内である。また、日本統計学会賞と同様に、会員からの推薦に基づいて選考委員会が決定することになっている。多くの会員が関心を持って推薦を寄せてくださることが、賞の権威を高めることになるので是非ともご協力をお願いしたい。

以下では、検討の経緯について簡単に触れておきたい。2002年度に開催された理事会・評議員会で杉山前会長から「日本統計学会最優秀論文賞」の提案があったのを踏まえ、2003年度の理事会で理事会の中にワーキングを作り具体的に検討を行った。ここでは、このような賞の他に、統計学の今後の発展に大きく寄与するような活動を顕彰する賞も重要であることが指摘された。その後、教育委員会・教育部会から今回のような統計教育賞の提案があった。これらの提案を学会活動特別委員会（主査舟岡）において総合的に検討していただき、今回、上記の2つの賞が評議員会で承認された。なお、最近の研究業績に焦点を当てた日本統計学会研究業績賞も検討されているが、これについては日本統計学会賞との関連を明確にさせる必要があるなど、引き続き検討されることになっている。

2つの賞の創設によって、本学会の基盤が拡大し、より活気のある学会に発展することを願いたい。

11.2 規程

日本統計学会統計活動賞規程

名称：日本統計学会統計活動賞

趣旨：研究や教育に限らず、広く統計学及び統計の分野において高く評価しうる活動を顕彰する。

対象範囲：受賞の対象は、次に掲げる分野の活動である。

- (1) 統計学及び統計を支える基盤の充実・高度化（統計関連領域の研究・教育組織の設立、実務家へのサポート、統計に関する企画・推進等）。
- (2) 研究・教育のための環境整備に対する貢献（ソフトウェア、データ・ベースの開発及び支援等）。
- (3) 新たな研究領域・分野の開拓。
- (4) 新たな統計の作成（個人、グループ・団体等による統計の作成と継続、及び作成機関における従来活動を超えた取組み等）。

受賞対象は、毎年2件以内とする。

選考方法：受賞対象となる活動は、日本統計学会に設けた選考委員会が会員からの推薦を受けて選考する。選考委員会は、日本統計学会会長、前会長、理事長、学会活動特別委員会委員長、及び会長が推薦し評議員会が承認した者若干名により構成する。選考委員の任期は一年とし、再任を妨げない。最終選考は他の学会賞選考委員会との合同委員会における調整を経て決定する。

賞の内容：受賞対象となる活動を担った個人又はグループ・団体には、賞状及び賞牌を授与する。

発表：選考委員会は、選考結果を日本統計学会評議員会及び総会に報告し、大会期間中に授賞式を行う。

日本統計学会統計教育賞規程

名称：日本統計学会統計教育賞

趣旨：統計教育の研究及び実践において顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰し、わが国の統計教育の発展並びに統計の普及、啓蒙に貢献することを目的とする。

対象範囲：授賞の対象となる者は、次に掲げる分野において多大の貢献のあった個人又は団体とし、日本統計学会の会員・非会員の別、国籍を問わない。

- (1) 統計教育に関する著書，論文
 - (2) 統計教育の実践
 - (3) 統計教育に用いるソフトウェア，テキスト，教材等の開発
 - (4) 統計の普及，啓蒙
 - (5) その他統計教育の発展に寄与する活動
- 授賞対象者は、毎年2名以内とする。

選考方法：授賞対象者は、日本統計学会に設けた選考委員会が会員からの推薦を受けて選考する。選考委員会は、日本統計学会会長，前会長，理事長，統計教育委員会委員長，及び会長が推薦し評議員会が承認した者若干名により構成する。選考委員の任期は一年とし、再任を妨げない。最終選考は他の学会賞選考委員会との合同委員会における調整を経て決定する。

賞の内容：受賞者には、賞状及び賞牌を授与する。

発表：選考委員会は、選考結果を日本統計学会評

議委員会及び総会に報告し、大会期間中に授賞式を行う。

日本統計学会の各賞（日本統計学会賞・日本統計学会統計活動賞・日本統計学会統計教育賞） 規程の運用に関する申し合わせ

- (ア) 3つの学会賞選考委員会の委員長はいずれも、原則として日本統計学会会長とする。
- (イ) 日本統計学会会長が推薦する選考委員候補者に対する評議員会の承認は、以下の手続きにより行う。
各評議員に対して、郵送により選考委員としての適否を問う。
否とする回答が全評議員の1/3未満であった場合、選考委員として評議員会による承認が得られたものとする。
- (ウ) 最終選考のための合同委員会における調整を円滑に行うために、選考委員として3つの学会賞選考委員会のいずれかに属する者は、属さない他の学会賞選考委員会にはオブザーバーとして参加することとする。
- (エ) 各選考委員会を構成する選考委員の氏名は公表する。

12 科学研究費への応募促進について

田村 義保（統計数理研究所）・竹村 彰通（東京大学）

平成17年度の科学研究費の応募の時期となりました。会報等でお知らせしておりますように、14年度まで複合領域の分科であった「統計科学」が、15年度からは総合領域の情報学分科の中の一つの細目となっています。統計科学は赤池弘次先生をはじめとした先人の努力により分科としてたてられたもので、このような変更は残念なことです。その一つの原因は統計科学への申請件数が少なかったことがあげられます。

平成17年用の公募要領などの書類は、日本学術

振興会の科学研究費のホームページ

<http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/>

から入手することができます。このホームページには科学研究費に関するさまざまな情報が提示されております。例えば平成16年度の統計科学への新規課題申請件数は164件となっています。平成15年度には165件でしたのほぼ同数となっています。

科研費の予算総額が増加していることを考慮すれば、統計科学への申請件数も増えることが望ま

れます。

研究資金の流れが競争的資金へとシフトしつつある中で、科学研究費の獲得は、統計研究者の集団の存在を認識させるという意味も持っており、極めて重要です。申請の資格を持った統計研究者は統計科学への応募を是非ご検討ください。すでに科学研究費を継続中の方も、萌芽研究への応募などの可能性がありますので、こちらもあわせてご検討ください。なお、統計科学が細目になった

ことに伴って、審査員は必ずしも統計関係者とは限りませんので、申請書を作成する際には、統計関係以外の方々にも理解できるような申請書の書き方が必要と思われます。

なお、統計研究者の中には「経済統計学」あるいは「数学一般（含確率論・統計数学）」に応募される方もおられると思われます。研究者の関心に応じてこれらの分野への応募もご検討いただくようお願いいたします。

13 2004・2005年度評議員選挙結果

2004年6月14日、統計数理研究所において選挙管理委員、加藤剛、山下智史の両氏により開票が行われました。その結果、定員規定により下記38名が2004・2005年度の評議員に選出されました。（なお、有権者1369名中、有効投票者数は152票、述べ記名数695、無効0）
伊藤彰彦、稲葉弘道、岩崎 学、牛沢賢二、北川源四郎、木下宗七、国友直人、栗原考次、小西貞

則、佐藤整尚、清水邦夫、杉浦成昭、杉山高一、高橋 一、竹村彰通、田中 豊、田村義保、垂水共之、道家暎幸、大戸隆信、根本二郎、樋口知之、広津千尋、福井武弘、藤井光昭、舟岡史雄、前田忠彦、牧野都治、松原 望、丸山久美子、村上征勝、森棟公夫、矢島美寛、宿久 洋、山口和範、山本 拓、渡辺則生、渡辺美智子（以上38名、50音順）

14 第72回日本統計学会総会報告

日時：2004年9月5日（日）12：10～13：10

場所：富士大学 6号館681教室

開会：国友直人理事長

1. 会長挨拶：藤越康祝会長より、富士大学および大会運営関係者への感謝の言葉が述べられ、今大会の開催状況の概略が述べられた。
2. 議長選出：景山三平会員を議長に選出した。
3. 2003年度事業報告、同決算報告、および会計監査報告：南美穂子庶務会計担当理事より、資料（付表）に基づいて事業報告案および決算報告案の説明があり、引き続き垂水共之の監事より会計監査報告がなされ、承認された。
4. 評議員会からの報告：藤越康祝会長より、9月3日に開催された評議員会にて、2つの賞（統計活動賞、統計教育賞）の新設が承認されたこと、賞の趣旨、選考方法の概要につい

での紹介があった。統計関連学会連合への参加が承認された旨、および同連合の今後の活動見通しが説明された。和文誌が年2回刊行されることになったことに伴い、会員の積極的な投稿について依頼があった。また9月4日の新評議員会で、竹村彰通氏が新理事長に選ばれた旨の報告があり、竹村新理事長より挨拶があった。なお松田芳郎会員（日本学術会議第19期会員・経済統計学）より、統計関連学会連合については、経済系などを含む人文・社会科学系の統計関連諸団体の参加を得て全体的な組織になるように配慮願いたい旨の発言があり、藤越会長より、発足当初は現在連絡委員会に参加している6学会で活動を開始する見通しであるが、その後は他の関連学会も受け入れる方針であり、上記についても是非考慮していきたい旨の回答があった。

2003年度事業報告

(2003. 4. 1～2004. 3. 31)

1. 日本統計学会第71回大会の開催
2003年9月2日、3日、4日、5日の4日間にわたり、名城大学において開催した。
今回も統計関連学会連合大会の一環として開催した。
2. 第71回大会講演報告集の発行
連合大会の講演報告集に含まれる。
3. 会誌の発行
Vol.1.33 No.1 (6月欧文誌), No.2 (12月欧文誌), No.3 (12月和文誌) を発行した。
4. 会報の発行
No.115 (4月), No.116 (7月), No.117 (10月), No.118 (1月) を発行した。
5. 賞の授与
第8回日本統計学会賞、第17回日本統計学会小川研究奨励賞を授与した。
6. 研究部会の活動
次の2つの研究部会が予定通り終了した。
「QOL測定尺度構成の研究」(丸山久美子主査:2001年12月発足,2003年11月終了)
「電子社会における統計教育のあり方に関する研究」(村上征勝主査:2001年12月発足,2003年11月終了)
次の研究部会が活動中である。
「多重比較とその関連分野の総合的研究」(鎌倉徳成主査:2002年12月発足,2004年12月終了予定)
7. 研究分科会の活動
次の3つの研究分科会が活動中である。
「統計教育部会」(村上征勝主査:2002年12月発足,2006年12月終了予定)
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(森塚公夫主査:2002年12月発足,2006年12月終了予定)
「統計シミュレーション研究分科会」(杉山高一主査:2002年12月発足,2006年12月終了予定)
8. 各種委員会の活動
評議員会、理事会、その他の各種委員会を開催した。
9. その他
(i) 会員名簿を発行した。
(ii) 国際交流を推進した。
(iii) インターネット経由での情報発信を促進した。
(iv) 統計関連学会の連携を進めた。
(v) 入会者拡大の方策を検討・実施した。
(vi) 学生会員の事務手続きを変更した。

会計監査報告書

2004年7月30日

日本統計学会会則第22条にもとづき、2003年4月1日より2004年3月31日までの会計経理を監査した結果、決算書のとおり相違ないことを認めます。

監事

寺崎 泰之 監

2004年度事業計画

(2004. 4. 1～2005. 3. 31)

1. 日本統計学会第72回大会の開催
2004年9月3日、4日、5日、6日の4日間にわたり、花巻市の富士大学において開催する。
今回も統計関連学会連合大会の一環として開催する。
2. 第72回大会講演報告集を発行
連合大会の講演報告集に含まれる。
3. 会誌の発行
和文誌を年2回刊行とし、Vol.1.34 No.1 (6月欧文誌), No.2 (12月欧文誌), No.1 (9月和文誌), No.12 (3月和文誌) を発行する。
4. 会報の発行
No.119 (4月), No.120 (7月), No.121 (10月), No.122 (1月) を発行する。
5. 賞の授与
第9回日本統計学会賞、第18回日本統計学会小川研究奨励賞を授与する。
6. 研究部会の活動
「多重比較とその関連分野の総合的研究」(鎌倉徳成主査:2002年12月発足,2004年12月終了予定)
「統計教育部会」(村上征勝主査:2002年12月発足,2006年12月終了予定)
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(森塚公夫主査:2002年12月発足,2006年12月終了予定)
「統計シミュレーション研究分科会」(杉山高一主査:2002年12月発足,2006年12月終了予定)
7. 研究分科会の活動
各種委員会の活動
評議員会、理事会、その他の各種委員会を開催する。
8. 各種委員会の活動
評議員会、理事会、その他の各種委員会を開催する。
(i) 評議員選挙、会長選挙を実施する。
(ii) 国際交流を推進する。
(iii) インターネット経由での情報発信を促進する。
(iv) 統計関連学会の連携を進める。
(v) 入会者拡大の方策の検討・実施
(vi) 会誌購読拡大の方策の検討・実施
9. その他

<2003 年度決算>

(1) 貸借対照表 (2004年3月31日現在) (単位:円)

科目	借方	貸方	期末	期首	科目	期末	期首
固定資産	2,056,567	1,966,438	1,966,438	2,056,567	学芸自己資金	5,000,000	5,000,000
流動資産	9,982,340	10,247,686	10,247,686	9,982,340	学芸活動積立金	200,000	200,000
現金	9,164	35,924	35,924	9,164	役員旅費補助立金	600,000	600,000
振替口座	14,921	27,484	27,484	14,921	名簿作成積立金	1,100,000	1,100,000
預貯金	9,958,255	10,184,278	10,184,278	9,958,255	OA機器積立金	2,000,000	2,000,000
					事務職員退職金積立金	1,132,340	1,132,340
計	12,038,907	12,214,124	12,214,124	12,038,907	繰越金		

(11) 収入

科目	細目	予算額 (単位:円)	決算額 (単位:円)
今期繰入金		1,132,000	1,132,340 2)
学芸活動積立金取崩		200,000	0
OA機器積立金取崩		100,000	100,000
役員旅費補助取崩		100,000	0
名簿作成積立金取崩		600,000	600,000
会費収入		10,699,000	10,699,000 3)
	名譽会員・正会員	9,390,000	9,434,000
	学生会員	669,000	491,000
	謝及請求分	700,000	764,000
賛助法人費		1,500,000	1,500,000 4)
団体会員費		120,000	160,000 5)
科学研究成果公開促進費(学術定期刊行物)		1,000,000	1,000,000
雑収入		1,902,000	2,200,833
	雑誌購読料	700,000	583,580 6)
	利息収入	2,000	1,106 7)
	広告収入	1,200,000	1,468,000 8)
	その他	0	148,147 9)
大会開催費		700,000	700,000
計		18,053,000	18,082,173

- (2003年度決算)
- 事務用品の什器・備品等の購入時簿価、減価償却はしていない。パーソナルコンピュータの買い替えにより前年度より減額になった。
 - 予算の方は千円未満四捨五入、貸借対照表参照。
 - 新入会金分(65)と2002年度以前の未納取戻等を含む(内訳:2002年度以前未納分764,000円、2003年度以降前受け金分128,000円、A会金分65,000円)。
 - 賛助法人21件。賛助法人数は入会時の会費の10倍を1口とし、賛助法人費を低上げしていない。従って、各社1口の会費は異なる。
 - 団体会員4件(1件40,000円)。
 - 定期購読国内版誌55種(166冊、495,000円)、海外版誌22種(66冊66,000円)、非定期予約誌上およびバックナンバー売上(22,580円、送料分を含む)、雑誌2号3号の大幅な遅延により未回収分15件と和文誌のみ未回収分3件あり。
 - 預金利率が低いこと。
 - 広告掲載料の内訳:会報No.115-118号分(935,000円)名簿(533,000円)。
 - 出版者著作権協議会より入金。
 - 115号34頁、116号30頁、117号36頁、118号30頁計130頁。
 - 会誌、会報後送用の角2封筒、名簿送用の角2封筒、定型封筒、名簿訂正用紙、会則変更用紙、入会のお誘いの印刷物および総会資料等。
 - 「多岐にわたる」とその関連分野の総合的研究(研究部会、研究部会)。
 - 学芸活動特別委員会、学芸活動特別委員会。
 - 日本統計学会賞、小川賞受賞者との会誌。

(11) 支出

科目	細目	予算額 (単位:円)	決算額 (単位:円)
印刷費		7,174,000	7,317,955
	会誌(33巻1.2.3号)	4,854,000	5,143,254
	会報(115号-118号)	1,200,000	1,065,120 10)
	名簿印刷費	720,000	749,700
	その他	400,000	359,881 11)
通		715,000	700,000
	分租金	700,000	700,000
	総額	15,000	0
研究部会費		300,000	100,000 12)
研究分科会費		60,000	60,000
学芸運営会合費		390,000	325,493
	評議員会	100,000	88,893
	特別委員会	40,000	40,000 13)
	統計製作委員会	20,000	20,000
	会誌編集委員会	30,000	0
	理事会	180,000	163,370
	その他	20,000	13,230 14)
経		4,329,000	3,928,383
	一般事務人件費	2,600,000	2,797,900 15)
	校正通集事務人件費	600,000	125,000
	發送事務人件費	285,000	157,700
	事務用品	200,000	189,317
	事務旅費	400,000	364,265
	租税公課諸負担	24,000	24,000 16)
	その他	220,000	270,201 17)
学芸事務業務委託費		900,000	887,696 18)
通信・郵送費		3,185,000	2,139,610
	会誌送料	650,000	568,393 19)
	会報送料	1,200,000	631,214 20)
	名簿送料	535,000	282,340
	その他通信・郵送料	800,000	657,663 21)
役員旅費補助		150,000	0
各種分租金		115,000	111,137
	日本経済学会連合	35,000	35,000
	ISI	25,000	26,137 22)
	機関型連合	50,000	50,000
	国立情報学研究所	5,000	0
ネットワーク維持費		20,000	23,730 28)
OA機器購入費		100,000	283,483 24)
事務職員退職金積立		150,000	150,000
名簿作成積立金		300,000	300,000
予備費		165,000	107,000 23)
繰越金		0	1,647,686
計		18,053,000	18,082,173

- 広告案件のため特別活動費を含む。
- 郵民共済掛け金。
- 学芸事務業務委託費内訳:会報原簿管理費50,000円、会費請求年3回459,340円、口座振替業務費32,400円、新入会費原簿作成費23,800円、住所変更費37,600円、ラベル作成費214,950円(9回分)、会費名簿帳下23,880円、その他、大会時出場紙印刷、車検、年会便費用により相当額減額になった。
- 国内会誌取送のための送料は含まない。
- 新入会費117号の送料はプロگرام等と同時に発送したため前連学連合大会会計より支払われた。
- 新入会費への名簿・会誌・会報等の送料、海外への会誌送料、会員への会誌送料、広告費等のための送料、印刷機への送料、重要資料の郵留料、電話・FAX代、振込み手数料、会誌取送のための送料、理事への宅配便、大会時出張紙、アルバイトの交通費等、年会便費用より相当額減額になった。
- 300スタイルマシン。
- ドメイン名使用料。
- OA機器および周辺機器等(パーソナルコンピュータ、サーバー、プリンター、複合機、H.U.D.)。
- 供花、ロゴマーク費、ロゴマーク作成のための謝金、賛助会員大会参加費等。

<2004年度予算>

(2004年4月1日現在)

(1) 貸借対照表

(単位 円)

借 目	方 期 首	貸 方 期 首	貸 方 日 科 目	借 方 期 末
固定資産	1,966,438		学会自己資金	1,966,438
流動資産	10,247,686		学会活動積立金	5,000,000
現金	35,924		役員旅費補助積立金	200,000
振替口座	27,484		名簿作成積立金	300,000
預貯金	10,184,278		OA機器積立金	1,100,000
			事務職員退職金積立金	2,000,000
			繰越金	1,647,666
計	12,214,124		計	12,214,124

(ii) 取入

(単位 千円)

科 目	目 細 目	取 入 額
今 期 繰 入 金		1,647
学会活動積立取込		650
OA機器積立金取込		100
役員旅費補助取込		100
会 費 取 入	11,090	
	名誉会員・正会員	10,210
	学生会員	180
	謝及請求分	700
賛助法人費		1,200
団体会員費		120
科学研究費補助金		1,000
「研究成果公開促進費学術定期刊行物」		
雑 取 入		1,401
	会誌購読料	700
	利子収入	1
	広告収入	700 ¹⁾
大会開催費		700
計		18,008

(2004年度予算注)

- 1) 会報の広告掲載費70万円。
- 2) 連合大会が原則として独立採算制であるため、大会関係の予算はまとめて記載している。統計学会から連合大会へ分担金として支出し、連合大会終了後に統計学会へ返還予定。
- 3) 会誌と会報などの発送用封筒や入会のお誘いの印刷など。
- 4) 統計学会賞、小川賞の懇親会招待分。
- 5) 事務員交代に伴い、引継ぎにかかる人件費増加分。
- 6) 事務員の交通費、および大会出張費。
- 7) 会長選挙に伴う郵送費を含む。

(iii) 支出

(単位 千円)

印刷費	科 目	目 細 目	支 出 額
大会開催費		会誌(34巻 E1, 2, J1, 2) 会報(119~122号) その他	5,480 1,100 400 ³⁾
		分担金	700
		懇親会	15 ⁴⁾
研究部会費			300
研究分科会費			60
学会運営会合費			450
		評議員会	160
		特別委員会	40
		統計教育委員会	20
		会誌編集委員会	30
		理事会	180
		その他	20
事務費			5,379
		一般事務人件費	2,600
		特別事務人件費	846 ⁵⁾
		校正編集事務人件費	600
		発送事務人件費	250
		事務用品	190
		事務室借料	400
		租税公課諸負担	24
		その他	475 ⁶⁾
学会事務業務委託費			800
通信・郵送費			2,220
		会誌送料	760
		会報送料	660
		その他通信・郵送料	800 ⁷⁾
役員旅費補助			150
各種分担金			115
		日本経済学会連合	35
		I S I	25
		権野宮連合	50
		国立情報学研究所	5
ネットワーク維持費			20
OA機器購入費			100
事務職員退職金積立			150
名簿作成積立金			300
予備費			269
計			18,008

5. 2004年度事業計画と同予算について：佐藤整尚庶務会計担当理事より，資料（付表）に基づいて事業計画案（例年の事業の他会長選挙が予定されることなど）と予算案の説明があり，質疑応答（各種分担金のうち国立情報学研究所分の支出状況についての確認^{*1}）の後，ともに原案通り承認された。
6. 第73回大会について：国友直人理事長より，広島大学からの開催の申し出を受け理事会・評議員会では日本統計学会，応用統計学会，日本計量生物学会の3学会の連合大会としての開催をお願いしたいとの案が示され，承認された。大会校を代表し大瀧慈会員から，挨拶および会場がホテルとなる見込みであること，日程の候補などの説明があった。
7. 会則の変更について：国友理事長より，資料^{*2}に基づき，会則第16条における会費の長期滞納者に対する扱いに際する現状の問題点と変更の趣旨に関する説明がなされ，質疑応答の後，原案通り16条の変更が承認された。
8. その他：国友理事長より，約25年にわたり事務局員としてご尽力いただいた関根照代さんが近々退任される旨の紹介があり，会場からの拍手で謝意を表した。また，南庶務会計担当理事，国友理事長も今大会限りでの退任であることに伴う挨拶があった。なお，南理事の後任として佐藤理事が庶務会計の責任者になった。
9. 日本統計学会賞・小川研究奨励賞の報告：藤越康祝会長より，日本統計学会賞受賞者3名（小西貞則氏，森棟公夫氏，谷口正信氏）と小川研究奨励賞受賞者（内田雅之氏）が受賞理由とともに紹介された。

以上をもって総会は閉会し，引き続き，学会賞授

賞式が行なわれた。受賞者4氏が簡単な挨拶をおこなった。

*1 情報学研究所への分担金について：

情報学研究所への分担金は，2001年度以降，請求がなく，支払を行っていないが，電子ジャーナルに関するシステムは今年度後半に制度が変更される予定であるので，来年度の予算案で制度の変更を反映することとする。

*2 会則の変更（長期会費滞納者について）：

現行 -----

16. 会員が次のいずれかに該当するときは，評議員会の議決を経てこれを除名することができる。

- 1) 本会の名誉を傷つけ，または本会の目的に反する行為のあったとき
- 2) 会費を長期間にわたって滞納したとき

変更案 -----

16. 会員が次のいずれかに該当するときは，評議員会の議決を経てこれを除名する，あるいは退会したものとみなすことができる。

- 1) 本会の名誉を傷つけ，または本会の目的に反する行為のあったとき
- 2) 会費を長期間にわたって滞納したとき

附則の日付 2003年12月7日を2004年9月6日に変更する。

15 2002・2003年度理事会議事録

紙面の都合上2002・2003年度理事会議事録は次号に掲載いたします。

16 会合案内

* 会合案内

- 国際シンポジウム「システマティック・レビューとメタ・アナリシス」

日時：2005年2月25日（金） 9：00 - 17：30

会場：国立保健医療科学院・講堂（埼玉県和光市）

主催：厚生労働科学研究費研究班「エビデンスを適切に統合するメタ・アナリシスの理論，応用と普及に関する調査研究」

組織委員会：丹後俊郎（国立保健医療科学院），折笠秀樹（富山医科薬科大学），津谷喜一郎（東京大学大学院），野口善令（藤田保健衛生大学），山岡和枝（国立保健医療科学院）

招待講演者：

Professor Joseph Lau（New England Medical Center, USA）

Professor John Ioannidis（University of Ioannina, Greece）

Professor Doug Altman（Center for Statistics in Medicine, UK）

Professor Ingram Olkin（Stanford University, USA）

参加費：無料（ただし懇親会は会費2000円）

一般演題（示説）申込期間：2004年9月1日（水）～2005年1月14日（金）（必着）

参加申込期間：2004年9月1日（水）～2005年2月10日（木）（定員300名）

（シンポジウム終了後の懇親会の申し込みもしております。）

照会先：

〒351-0197埼玉県和光市南2-3-6 国立保健医療科学院・技術評価部国際シンポジウム2005事務局，根津葉子

Tel：048-458-6223，FAX：048-469-3875，

Email：yokon@niph.go.jp

URL：<http://www.niph.go.jp/soshiki/gijutsu/sympo05/>

- 第3回東京理科大学医薬統計フォーラムのお知らせ

日時：2004年10月29日（金）午後1時～5時（終了後懇親会）

場所：東京理科大学森戸記念館

主催：東京理科大学大学院工学研究科

参加費：講演会は無料，懇親会は3,000円。協賛企業と医薬統計コース関係者は懇親会費も無料。

プログラム：

13：00--13：05 開会の挨拶

本阿弥眞治（東京理科大学大学院工学研究科長，医薬統計コース実施委員長）

13：05--14：45 チュートリアルセッション

1．メタアナリシスの役割と問題点

浜田知久馬（東京理科大学工学部助教授）

2．海外データの利用における統計的省察の過程
濱崎俊光（大阪大学大学院医学研究科助教授）
休憩

15：00--17：00 研究発表（1人20分，演題名は変更の可能性があります）

3．活性物質のスクリーニングにおけるin silico法の活用 角元慶二（修士2年）

4．相乗作用評価に関する研究 松永信人（博士2年）

5．癌の第II相臨床試験における2段階割り付け法の研究 正木伸之（修士2年）

6．計量的予後因子を取り入れた最小化割付法の研究 遠藤輝（博士2年），長谷文雄（2003年度修士2年）

7．製薬企業所有の安全性DBを想定したシグナル検出方法の性能評価 松下泰之（修士2年）

17：00 - 19：00 懇親会（2階第1会議室）

申し込み方法：

次の内容をメール（biomed@ms.kagu.tus.ac.jp）またはFax（03-3260-5770）で下記の医薬統計フォーラム事務局までお知らせ下さい。

氏名（複数列举可），所属（会社，大学等），連絡担当者の連絡先（連絡先住所，メールアドレス）

ス, Fax番号), 懇親会(参加・不参加)

医薬統計フォーラム事務局:

〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3 東京理科大学
工学部経営工学科内

Tel: 03-5228-8350, Fax: 03-3260-5770,

Email: biomed@ms.kagu.tus.ac.jp

会場までの道筋:

(<http://www.tus-net.com/entre/a.map.html>参照のこと)

*科学研究費研究集会案内

- 科学研究費補助金, 基盤研究(A)(1)「時空間統計解析の理論と応用」

(研究代表者: 東京大学・矢島美寛, 課題番号: 15200021)による研究集会(研究分担者: 大瀧 慈・広島大学, 統計数理研究所・尾形良彦, 中央大学・鎌倉稔成, 東京工業大学・間瀬茂)を下記の要領で開催いたします。

集会名:「時空間点過程の推測理論と応用」

日時:2004年11月3日(水), 4日(木), 5日(金), 6日(土)(3日午後より開催, 6日午前解散を予定)

場所:鹿児島県市町村自治会館(鹿児島県庁前)

会場案内

<http://www8.ocn.ne.jp/~j-kaikan/index-unplug.htm>

- 観察研究および実験研究における因果推論
成蹊大学工学部 岩崎 学
東京大学医学部 松山 裕

標記シンポジウムを下記の要領で開催します。

日時:2004年12月14日(火)13:30~17:00

会場:東京大学医学部附属病院 臨床講堂(東京都文京区本郷)

主催:科学研究費補助金基盤研究(A)(1)No.16200022

参加費:無 料

情報源:<http://www.kakenbio.com>

本シンポジウムでは, 傾向スコア(propensity score)や観察研究での因果推論で著名なUniv. of PennsylvaniaのProf. Paul R. Rosenbaumによる招待講演“Experiments & Observational Studies: Causal Inference in Statistics”を予定しています。それ以外の講演も現在交渉中です。

照会先:岩崎 学

成蹊大学工学部 経営・情報工学科

〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

E-mail: iwasaki@is.seikei.ac.jp

備考:上記科研費の補助によりシンポジウムやセミナーおよび月例研究会などを随時開催しています。詳しくは科研費のホームページwww.kakenbio.comをご覧ください。

- 科学研究費 基盤研究(A)「潜在変数を用いた構造の統計的分析」(課題番号 No.(A)(1)15200022, 研究代表者: 和合肇)による国際コンファレンスのご案内

研究集会名:“Recent Development of Statistical Modeling in Marketing ~ Latent Variable and Latent Structure Approach ~ ”

日時:2004年12月1 - 2日

場所:統計数理研究所

内容・目的:As a series of international conference financially supported by the Japanese ministry of education scientific research grant on the topic “Statistical analysis on the structure by using latent variables (No. (A) 15200022)”, we now shed light on the area of “Marketing”.

The possible topics include factor analysis, mixture models, structural equation models, missing data models, and e.t.c. All of these have been commonly used in marketing problems.

招待講演者:

Greg M. Allenby (Ohio State University)
Pradeep Chintagunta (University of Chicago)
Terry Elrod (University of Alberta)
Peter E. Rossi (University of Chicago)
Michel Wedel (University of Michigan)

URL:<http://www.econ.tohoku.ac.jp/~terui/marketing-conf.htm>

参加費：無料

国内講演者の募集：マーケティング・サイエンス、マーケティング・リサーチ全般の研究報告を募集致します。潜在変数の利用は必ずしも必須条件と致しません。ご講演いただける方は、10月末日までに下記へお申込みください。講演希望者が多数の場合はご希望に添えない場合があります。講演者には旅費を支給いたします。その他参加を

希望される方で旅費の必要な方はご相談ください。

(注) ご講演いただく場合は、報告論文(予稿)を11月7日までに提出いただくことになります。

講演申込先：照井伸彦・東北大学大学院経済学研究科 (terui@econ.tohoku.ac.jp)

懇親会：12月1日のプログラム終了後、懇親会をウェスティンホテル(恵比寿ガーデンプレイス；会費一般1万円、学生6,000円；先着30名)で予定しております。ご参加いただける方は、11月15日までに下記へ事前にお申込みください。

懇親会申込先：樋口知之・統計数理研究所 (higuchi@ism.ac.jp)

17 事務局から

投稿のお願いとお知らせ

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。新刊の紹介なども歓迎いたします。

来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内(教員公募)なども受け付けております。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル(テキスト形式)の送付をお願い致します。

原稿送付先

〒560-0043 豊中市待兼山町1-7
大阪大学大学院経済学研究科 大屋 幸輔 宛
Tel : 06-6850-5245 (ダイヤルイン)
Fax : 06-6850-5277
E-mail : kaiho@jss.gr.jp
(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9
大和ビル内財団法人統計情報研究開発センター
日本統計学会係
TEL : 03-5467-0481, FAX : 03-5467-0482
E-mail : jstatsoc@sinfonica.or.jp

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

岩城 克明会員(2004年5月25日)

退会者

登尾和泉, 高塩仁愛, 岩城克明

長期間連絡不能により、退会したとみなされた者

安部泰史，飯田和之，伊藤和子，加賀谷修，河原秀樹，菊池省二，日下大介，香村由紀，下川元継，鈴木隆一郎，富田匡道，内藤馨，野口裕之，堀口英樹，美馬芳江，茂刈聡，山田俊介，山中勉

現在の会員数（2004年9月16日現在）

名誉会員	25名
正会員	1449名
学生会員	76名
総計	1550名
賛助会員	17法人
団体会員	3団体

- ・統計学会ホームページURL：
<http://www.jss.gr.jp>
- ・統計関連学会ホームページURL：
<http://www.ajss.gr.jp>
- ・住所変更連絡用e-mailアドレス：
jusho@jss.gr.jp
- ・広報連絡用e-mailアドレス：
kaiho@jss.gr.jp
- ・その他連絡用e-mailアドレス：
jimu@jss.gr.jp